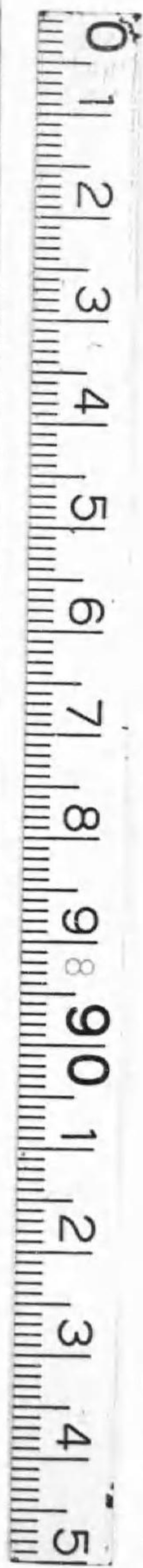


特218

945

字休



始



特218  
945



## 序

官幣大社宇佐神宮は、鎮西第一の大社にして、往古は宇佐宮と稱へられたり。祭神は三女神及應神天皇、神功皇后の御神靈なり。抑も三女神は、皇祖天照皇大神の教勅に因り、皇孫瓊々杵尊の日向國高千穂の峯に天降り給へるに先達ちて、筑紫の宇佐島に天降り居座して、皇孫を助けて、天壤無窮の皇謨を翼賛し給ひ、又神功皇后三韓征伐の大業を守護し給ひて、和親の御神徳を現はし給ひ、後に應神天皇の御神靈、及神功皇后の御神靈と一所に鎮まり座せしよりは、三神一徳の御神慮に依り、或は御神勅を和氣公に降し給ひて、能く金甕無缺の我國體を守護し給ひ、或は弘安の國難に際しては、敵國を降伏はし給ひて、國土の安全を守護し給へる等、赫々たる御神徳御座しませるに因り、皇室の崇敬は殊に厚く、夙に三國七郡の御封田を寄進し奉りて、我國第二の宗廟と崇め奉り、九箇國二島（九州）の徭役を課して、三十年毎に一度の御造營あり、勅使の參向隨時の祭禮等、最も莊嚴に行はせ給ひしも、時勢の推移に伴ひ、多少の變遷を経て、明治四年五月には官幣大社に列せられ、明治四十年五月には社殿は特別保護建造物に編入せられ、大正九年四月には、保存金として御内帑金を下賜せられ、越て大正十四年よりは、勅祭神社の列に加へられたり。而して現時は又國帑より、七十萬圓を投じ、昭和八年度より、六箇年繼續の事業とし

て、社殿の御造營境内の修治に着手せらるゝの祥運に逢へり。是れ誠に御威徳のしからしむる所なり。惟ふに神社の森嚴は國體の尊嚴に係り、國民道徳の隆替は敬神思想に根抵す。今や神宮恢弘の好機に際會せり、此の時にあたり、我ら日夕社頭側近に奉仕するものとして、わが大神等の御神威を弘く國民に知らしむべく、如何に必要なかを痛感せる折柄、小野精一氏の「宇佐」の上梓は誠に其の時を得たるものとして悦ばざるを得ず。

氏は永く大分縣立宇佐中學校教諭として、歴史科を擔任し本務の餘暇を以て、一向郷土史の研究にあたり、十有餘年眞摯なる論鑽と研究とは、既に幾多の著述となり、世に公にせられたるあり。此の度宇佐神宮史とも稱すべき、本書を公刊せられんとし、余に序を求めらる、就いて見るに、君が才筆は簡勁通俗にして流暢、君が研究は宇佐神宮各般に及び、讀者をして卷を措く暇あらざらしむ。郷土史研究者にとりて、將また參宮の業として、誠に好適と爲す所以なり。久しく待望したる快著なるを知り、喜んでこゝに江湖に紹介し、以て日本精神擴充の要を叫ばるゝ、昨今、時局解決の一鍵鑰たるを信じ、著者の努力に對し、深甚なる敬意を表し、以て序となす。

昭和九年一月一日

官幣大社宇佐神宮宮司 横山 秀雄 識

## 序

本書は、凡ゆる角度から觀た、宇佐といふ神の里を解剖したものであります。

九州は固より神國發祥の地です。其九州での神の都は宇佐でなくてはなりません。その神の都に生ひたつた、宇佐文化の諸相を、あらゆる角度から闡明にし、紹介したものが本書であります。

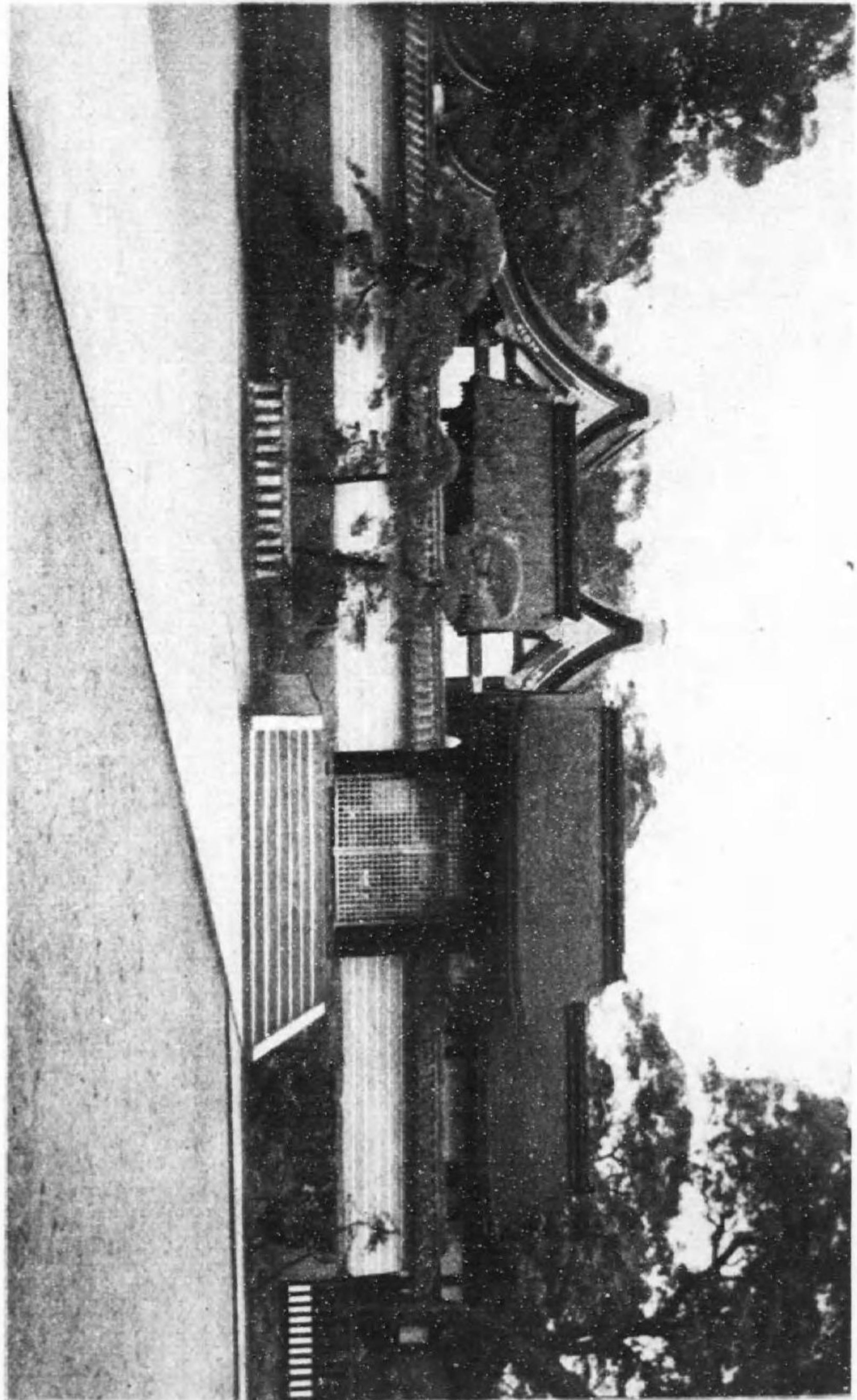
日々參拜し、觀光する人たちに、此特色ある宇佐文化を味つて貰ふ業ともならう。又この靈的に編まれた、八幡信仰史により、我民族精神である、敬神崇祖の念を養ふ資となすべく出來たのが、本書であります。

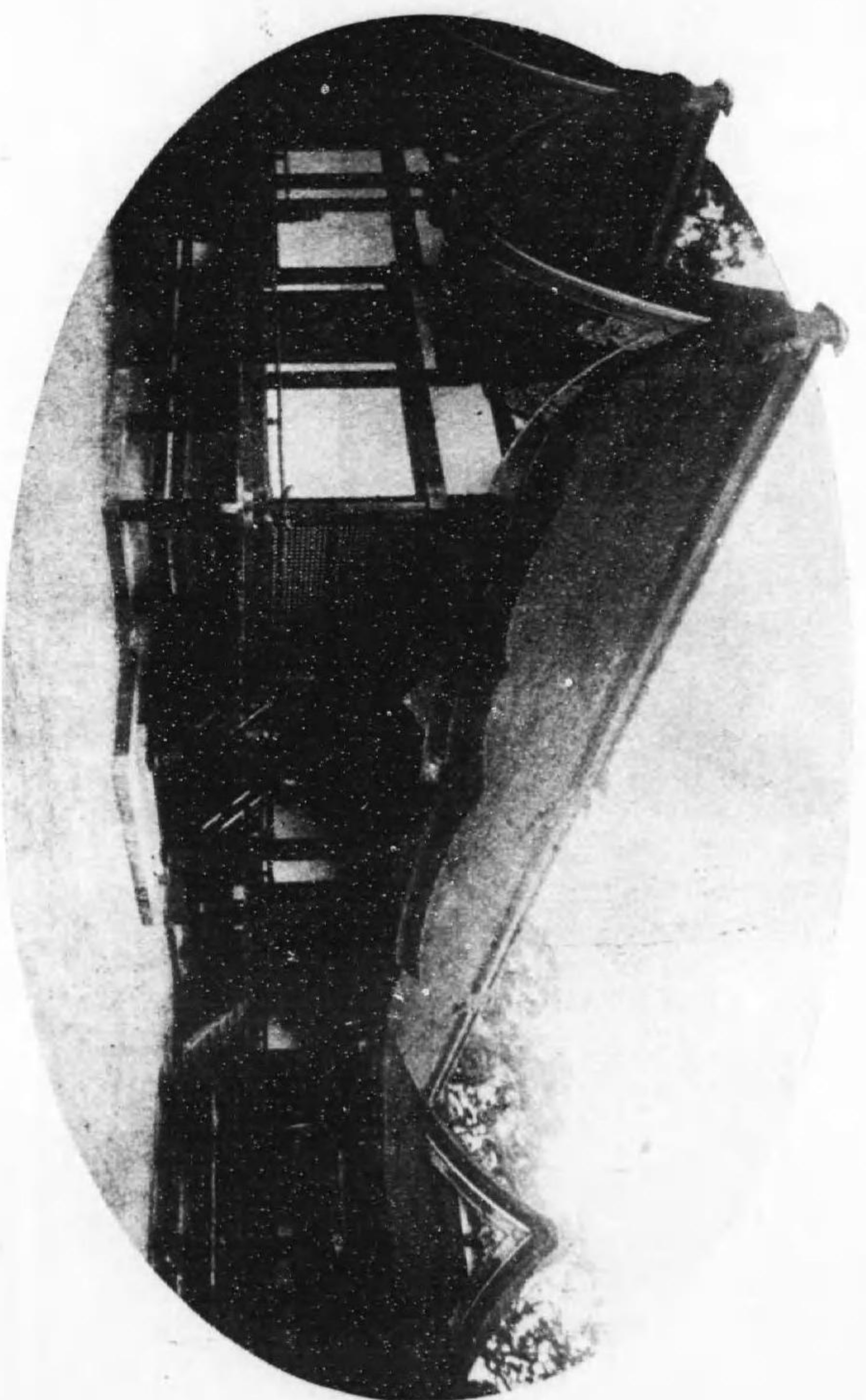
編者 小野 龍 膽

目次

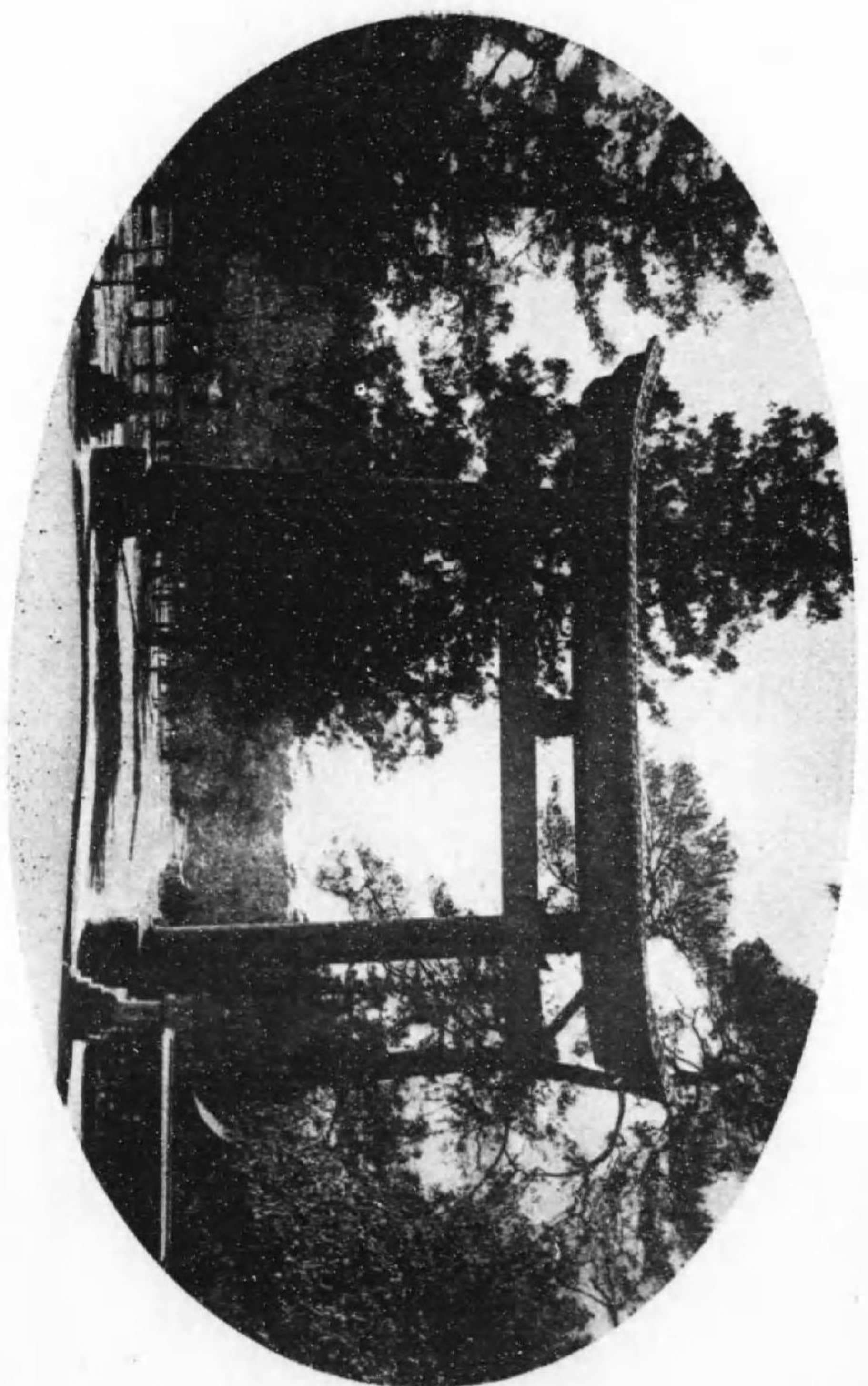
一 八幡宮は數からでも日本第一……………一  
二 史的に考察した八幡大神の御發現……………三  
三 女神、二殿の配祀……………八  
四 八幡様のお使は鷹か鳩かはた雞か……………一〇  
五 御神幸と民情……………一四  
六 宇佐文化……………二四  
七 神宮寺の濫觴……………三一  
八 仁聞と八幡……………三五  
九 奈良大佛と八幡……………三八  
一〇 僧形八幡……………四〇  
一一 和氣使、附男山八幡……………四三

一二 平家、社頭に武運を祈る……………四六  
一三 宇佐公通……………五二  
一四 緒方惟榮、黄金三體を冒す……………五四  
一五 大友義鎮の暴舉……………五八  
一六 大内、黒田、細川三侯の敬神……………六二  
一七八 幡式……………六七  
一八 寶物……………七一  
一九 宇佐に名物あり……………七四  
二〇 御許騒動……………七九  
二一 和氣清麿卿……………九五  
二二 宇佐の栞……………一一〇  
目次(終)



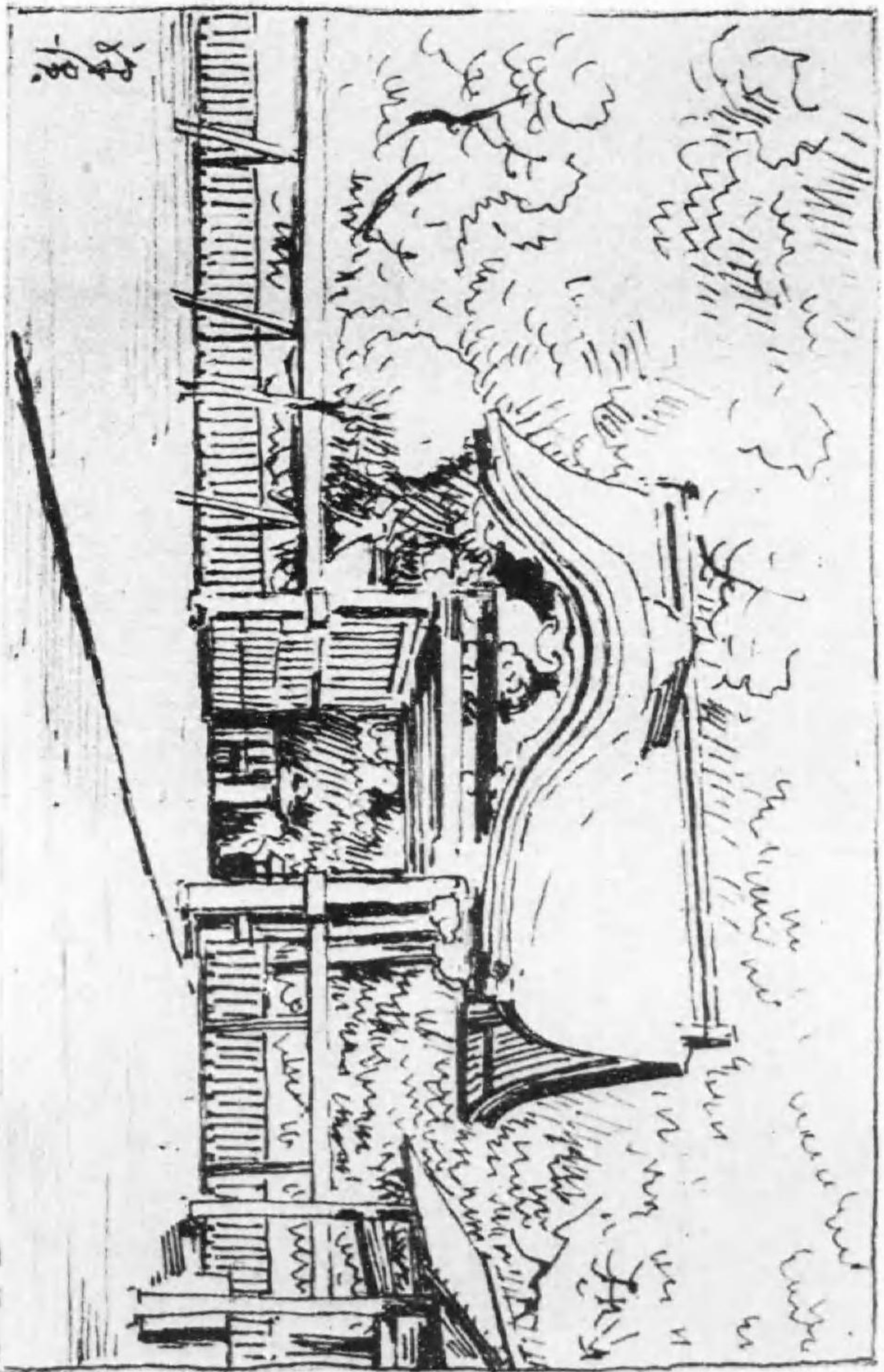


御本殿(特別保護建造物)



大鳥居及參道





(桃山式建築) 大西門



吳橋及彌勒寺の西門



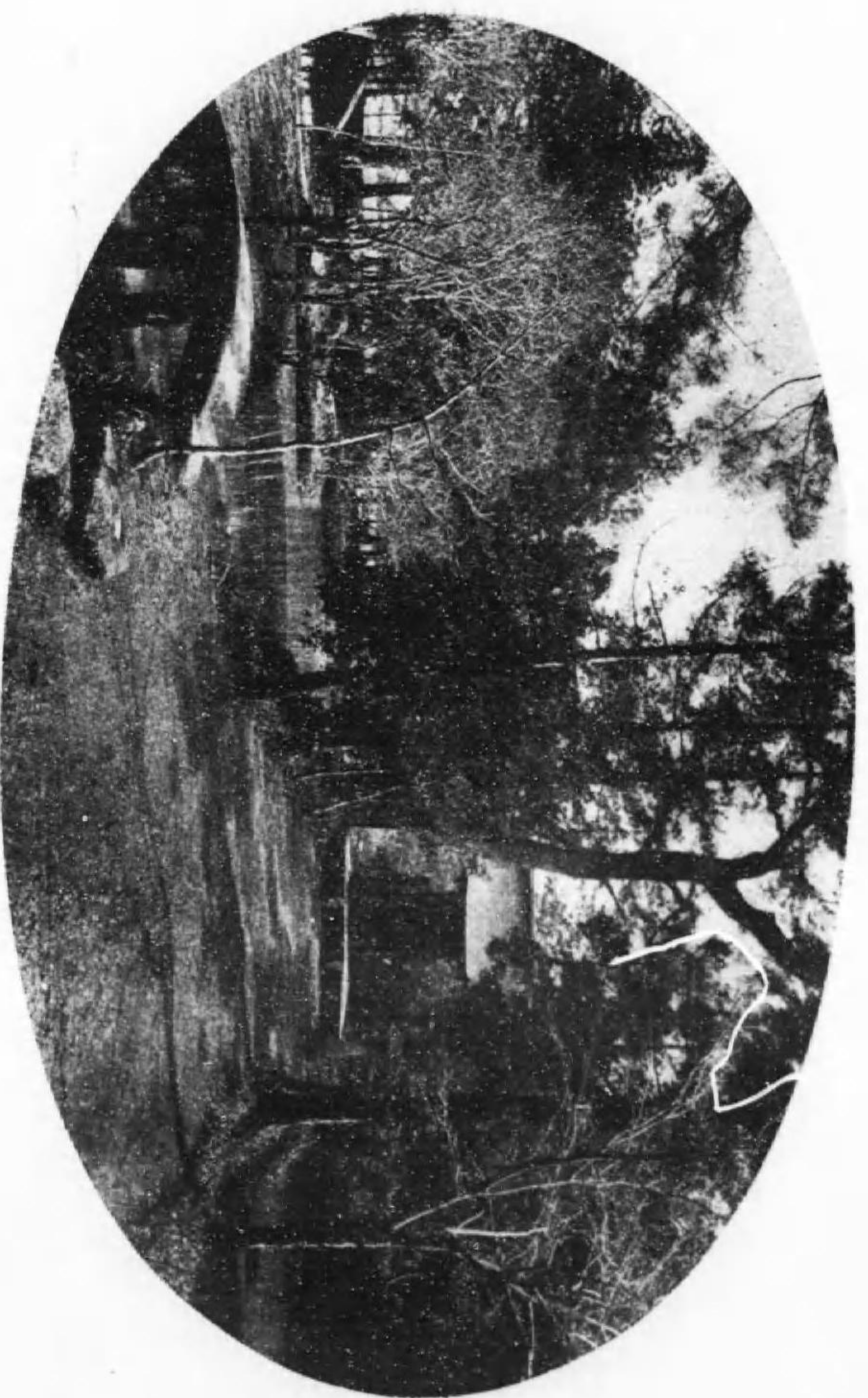
國寶朝鮮鐘（記事參照）



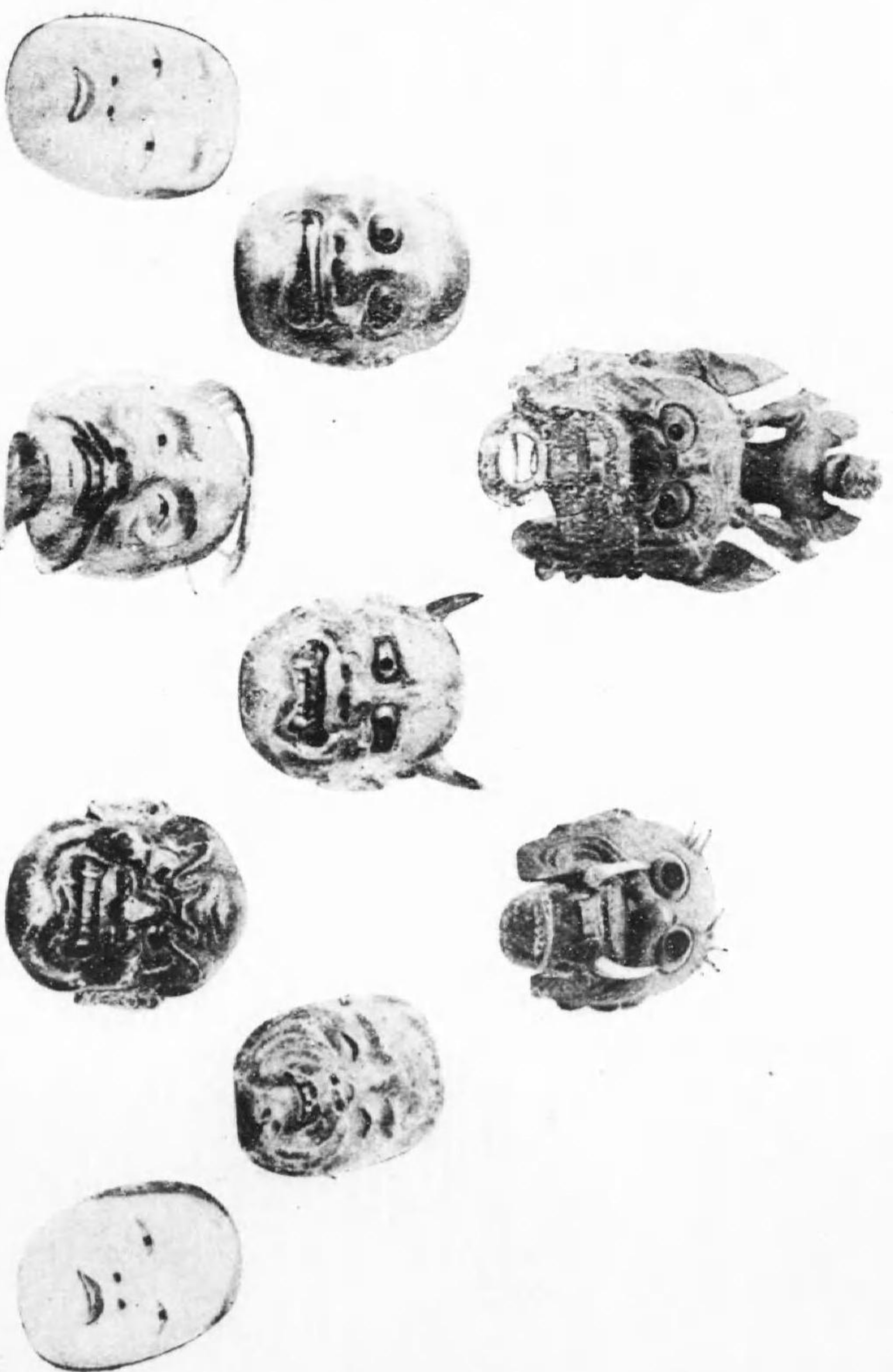
和氣清麻呂卿



大尾山之上氣之碑



護王神社及菱形池



蘭納蘇利及細川三齋公奉納の能面

## 宇佐

### (一) 八幡宮は數に於て日本第一

日本は神様のお聞き下さつた國で、海の果、山の奥、人の住む所に神様のお祭りしてない所は、ありません。

海の神、山の神、雨の神、風の神、文の神、武の神どんな神様もありますが、一番多い社は八幡様であります。

I  
それはなでそんなに多いかと申しますと、日本は武を尙ぶ國であるからです。八幡様は武の神、戦の神、又船の神であるから、全國津々浦々にまで、お祀りされることになつた



のです。

天満宮様も可なり多いが、これは文の神であるからです、然し天満宮様は小供向きで、小さい石社が多い、反対に八幡様は、武人に崇拜されるので、堂々たる社殿を有してゐる、此點からして八幡様の社の數は、恐らく日本第一でありませう。

昔聖武天皇が、一國に國分寺といふを一ヶ寺建てよと、勅命になつたが、宇多天皇は諸國の國府に、八幡様を一社必ず建てよと、勅命になりました。これから一國一社といふことになり、六十六ヶ國に八幡様が一社づゝあることになり、一國代表の神様といふ事になりました。

彼の源頼義といふ大將が、鎌倉に鶴岡八幡を御勸請申して、源氏の氏神と稱してから、専ら戰神となり、又源頼朝が天下を一統してから、諸國の守護に命じて、八幡様は源氏の氏神である、一國に一社を祀れと命じたので、一國一社が二様にも出來たわけであります。そこで八幡様といへば源氏のものゝやうになり、又多くは源氏の何ものかゞ、勸請申し

たのでありますが、よく調べて見ますと、伊勢の國に、伊勢平氏の棟梁、平忠盛の御勸請申したといふ、唯一の例外がないではありません。

何といつても、八幡様の本家本場は宇佐で、宇佐を中心に、波の廣がるやうに、波紋を描いて、豊前から九州、中國、と東によるほど社の數も稀薄になつてゐます。それではどれ位あるかと申しますと、ざつと數へて一万三千いくらあります。

## (二) 史的に考察した八幡様の御發現

さてお伊勢様について、第二の宗廟と仰ぎ、全國民の信仰の標的となつてゐる八幡様が、何の因縁で、此宇佐といふ尤も寄りつきの悪い、片田舎に御發現になつたかといふことが、頗る不可解の事に思はれますが、然しこれにはチャンと歴史の連鎖はあります、決して闇

夜に鉄砲を鳴らした様な、突発的なものではありません。

之を古典によつて調べて見ますと、天照太神が天孫の瓊々杵尊を、高天原からお下しになる前、天孫の先驅として、三女神(市杵島媛、田心姫、湍津媛)を我宇佐島(御許山)にお下しになつたのが、第一の因縁であります。其三女神を宇佐明神として、お祀りしてあつたのが、宇佐八幡の前身で、現に第二の御殿として祀られてゐます。

其三女神が宇佐島にゐたから、神武天皇が御東征の時、我宇佐にお立寄りになり、三十日も御滞在になつて、軍師を整へられたのです。其時に彼の宇佐明神に仕へてゐた、宇佐津彦、宇佐津姫の御兄弟が天皇をお迎へして、一柱懸宮といふを建て、御歓迎申しました。すると天皇様は何とお考へになつたか、其宇佐津媛を、天皇の參謀である、天種子命に妻はされました。此に第二の因縁が結ばれました。

其天種子命の子孫が藤原氏で、鎌足が出たり、不比等といふ人が出たりして、朝廷を傾ける勢力を持つてゐた。其不比等の全盛時代に、宇佐八幡は御鎮座になりましたのですか

ら、都の藤原氏と、宇佐の宇佐氏との間には、常に往復されてゐたものと考へられます。斯うした歴史の蔓を引き上げることが出来ます。

然し八幡様には「人間といふものは、いゝ加減なことを考へるものだ」と、御迷惑に思召してゐませう。又實は、淺ましい人間の智慧で判断したのです。

では御發現の事を神話そのまゝに取次ぎませう。

欽明天皇の廿九年、といへば髓分古い話、今の小倉山の麓に、鍛冶の翁といふがゐた、山田の大蛇を見たやうに、八つの頭を有してゐた、之を聞き傳へて行つて見ると、五行行けば三人は死ぬる、十人行けば五人は死ぬといふので皆恐れをなしてゐた。茲に大神比義といふ翁があつて、其正躰を見届けやうと、いつて見ると、金色の鷹が梢にとまつてゐるだけ、何ものもゐない。比義の翁は「何者の變化か正躰を現はせ」といふと、其鷹が今度は金色の鳩と化して飛んで来て、翁の袖にとまつたのです。すると翁は何だか、靈氣に觸れ、人間か神か分らぬ状態になり、三ヶ年も食を斷つてゐたが、欽明天皇の三十二年二月十

日、翁はいつた、

「我身に憑かるもの、もし神であるなら、吾前に姿を現はし給へ」といつた。すると優しい、三歳ばかりの童子が竹の葉の上に現はれ、

吾は是、人皇十六代譽田天皇、廣幡八幡麿也、

我名をば、護國靈顯威力神通大自在王菩薩

と、玉のやうな御聲で仰せられたので、比義翁は鋒を建てて迎へ、鍛冶場の土をとつて、其童子の形を作り、お祭りしたとの事です。今日も鉾立神事といふ祭典もあり、比義の作つた土人形は、神躰同様に神殿に納まつてゐるさうです。

「はふり子が汲む手や涼し神垣の下井の清水影も濁らす」

とは烏丸光胤卿が、御發現になつた、御鍛冶場の靈水を詠んだ歌ですが、「神の御心水」の名に背かず、清冽極まる、眞清水が渾々と、二千年このかた湧いてゐます。

然し神殿の出来たのは、それから百四十年も経つてから、元明天皇の和銅三年でした、

大神には又鷹と現はれ、鷹居の丘で荒れ廻はつたのです。すると又比義翁が穀を断つ一千日、誠をこめ大神の荒んだ御心の、鎮まらんことを祈つた、するとお告げがあつた。

「かく大空を飛翔するのは棲む所がなく我心が荒んだからである」と聞いて、翁は急いで神殿を作り御祀り申した。

さて神殿が鷹居に出来たが、餘りお氣に召さなかつたと見え、六年ぶれ、元正天皇靈龜二年、「小山田の林に移りたい」といふ、御告げがあつたので、又小山田に宮柱を建て、御遷座申した、然しまだく住み心地が良くなかつたと見え、恰も十年目、聖武天皇の神龜二年正月廿七日、最初御發現になつた、小倉山を開き、底つ岩根に宮柱太しくたて、小山田から御遷宮になりました。鷹居でも小山田でも、大廟建設の景勝の地でなかつたので、轉々と居を移し、最初御發現になつた地に、まひ戻つたといふわけです。

### (三) 女神二殿の配祀

上國には随分名高い、神社もありますが、今の八幡様の境内より結構な社地はありますまい、清らかな寄藻川が取囲み、宮居だけは一段高く、外輪山見たやうな丘陵が外廓をなし、二重にも世塵を隔て、御許山といふ秀峯を背負ひ、洵に壯嚴な寶境です、今日では甚だ俗化した感もありますが、當年はどんなに幽邃でしたらうか、八幡様も海内第一の景勝閑雅な地を選ばれたものでありませう。

時に大神が女神の、配祀を望まれたとはどんなものでせう、又比賣大神も、「大御神に副ひ奉りたい、」といふ御神誥で、聖武天皇天平五年に、今の第二の御殿が出来たのです。そこで、宇佐明神が看板をかけ換へて、比賣大神となり、八幡様に御殿を並べることになりました。

併し三殿相並ぶことになつたのは、三女神併祀から八十八年目、嵯峨天皇の弘仁十四年でした。八幡様の母君、神功皇后を三の御殿にお祭りすることになりました。

關西の日光が多武峯であるなら、九州の日光は宇佐でせう。晝も闇い二千年の茂みを分けて、石の華表をくゞり、礎道を登ると、先づ朱塗りの鳥居をくゞり、桃山式の西門を入れば、金碧燦然たる本殿が、破風を並べて耀いて見える。幽禽の囀るより外に、耳に響く音もない、勅使門の前に立つ、「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼれる」とは、宇佐では行教和尚が、八幡祠前で詠まれた歌だといつてゐます。誰でもそんな気分にくたれ、涙がこぼれるのであります。靜かに頭を擡げ、樓門の内を窺ふ、無數に立つ朱塗の圓い柱が、目を遮ぎる、キン／＼ギラ／＼黄金の戸槌、輝くばかりの三つの殿堂が、ズラリと並んで目を射る、其明るさ、其壯嚴さ、どんな罪の子でも、「南無八幡大菩薩」と唱へずにはをれまい。

## (四) 八幡様のお使は鷹か鳩か猪か、はた雞か

さて八幡様が、どうして武神として、崇められるやうになつたかと申しますと、中々勇壯な神様で、其小山田の假宮かりみやにおいでになるとき、神輿みこしに乗つて、多くの神人僧官をおつれになり、日向の果てに、御征伐になり、三年に七城を下したといふ、實戰を経験されてゐる。

實戰の御經驗は、まだ胎内たないにおはしましたとき、御母神功皇后が、新羅しらぎを御征伐になり逆巻く浪を破り、海外に武威を耀かしたことさへある、其御勇壯は母のお譲りもあらうが、生れぬさきから、馬に跨り、船に乗り、筒の音、弦の響に鍛はれたものであります。

それから御母は凱歌をあげて、御歸へりになり、筑前の蚊田かたといふ所で、御産の紐を解かれた。十二ヶ月といふ永い間胎内にやどり、實戰の御見學をなさつて生れたのが、武神

譽田別尊ほむたわけのみこと、即ち八幡大神であらしたのです。其お生れになつた時、手に鞆たもねの様な固い肉を、握られてゐたと申します。そこで御名を、大鞆別尊おほたもねわけのみこととも申しました。まだ胎内におはした時、千軍万馬の中を駆けめぐり、握る手にいつか力がこもつたと見えます。

あの遣唐使けんたうしといふのが、支那に往復するやうになると、武神の八幡様は船の神となつて終つた。遣唐使の船を出すと、早速八幡大神に海上の無事を祈る。無事で歸へると、報賽ほうさいする、それでお土産みやげものも、たんと八幡様のお庫くらに納まつたものです。

船の神、戦の神となつて、随分お困りになつたことがあります。それは足利時代のことでした。日本の海賊團が倭寇わこと稱して支那朝鮮の沿岸を掠奪りやくだつしたことがある、其海賊團の船には、必ず八幡大菩薩の旗をたて、出かける、海賊の守護神に招待されては、御迷惑千萬であつたらう。支那では其海賊船を八幡船はつせんせんと稱して、恐わがつてゐたといふ。八幡様もとんだ御迷惑な目に遭ひました。

八幡様は、御發現の時に鷹となつて現はれ、次いで鳩となり、又鷹居で鷹と現はれて飛翔されたが、鶏になつたこともあります。

こんな傳説がある。鬼が百段を一夜のうちに築き上げるから、蛇壺の池に住ませて呉れと交渉して來た。神様にも随分駈引がある。じつと百段を築かせ、九十九段出來て、今一段といふときに、雞となつて、コケツコウくと鳴いたので、鬼も住めなくなつたといつてゐます。

和氣清麻呂公が、流され人となつて、宇佐に參つて來ると、道鏡のやからが、公を奪ひ取らうとすると、猪が三百匹ほど八面山の方から駈けて來て、公を八幡様の神前まで護送したといふ、名高い話もある。

鷹になり、鳩になり、雞になり、猪になり、奇瑞を現はしてゐるが、戦神に似合はぬ、優さしい鳩にお好きであつたと見ゆる。彼の頼朝が、石橋山で敗れると、敵の追撃に合ひ窮して空井の中に投じた。すると敵の大將、大塲景親が追駈けて來て、弓で井戸の中を二

三度も掻きまわした。頼朝は一心不乱に八幡様を祈念してゐた。すると空井の中から、山鳩が二羽、バタ／＼と羽ばたきして飛んで出た。お蔭で頼朝も助かつたといひます。

木曾義仲は砥並山に勝ち、平維盛を追かけ、埴生八幡の前に出たので、勝戦を祈らした。すると一羽の白鳩が出て、旗の上にとまつたので、これは祈願成就のお驗だと喜んだとあります。

彼の大納言藤原成親が大將を希望し、八幡様に大般若經を讀んで、お祈りした。お經が半分も濟むと、山鳩が二羽社頭から喰ひ合つて落ちて來て、二羽共死んでしまつたので、これは八幡様が御受納下さらぬ驗であらうと、成親も其志を驕がへしたといふ。

斯うした話柄はそこらそんじよに、ザラにある。鳩を二羽向ひ合はして八の字とし、八幡様の徽章にしてゐる所もあります。

## (五) 御神幸と民情

今日では、何處の里でも、御神事と稱して、神輿を擔ぎ練り廻りますが、其御神輿を、神輿に遷して遠く動座する、其御神幸も、固より宇佐に始まりましたのですが、今日の御神幸と申すは、全く一種の祭典で、御神慮をお慰めするだけです、ところが、宇佐八幡は國司や神人に擁せられて、日向の賊を御征伐になつたり、行幸會と稱して、八攝社を御巡幸になつたり、今少し氣拔なことは、奈良の大佛が聖武天皇の御代に、お建ちになりました、奈良の都の果てまで、御神輿でお出かけになりました。して見ると宇佐の御神幸は、千年以上の歴史を有つてゐるわけであります。

然し其宇佐の神幸史も、千年も経つ間には、いろ／＼變遷はあります。時に今日の喧嘩

神事に練り廻る、あの三個の御神輿は、應永の昔、山口の大内義弘といふ武將の、獻納したものと申しますから、それからでも、優に四百年になります。見掛けの通りの御神輿、何らの飾りもなく、頑丈で堅固な、といふだけで、ちよつと型の變つたものでそれが中々重く、十人や二十人では、とても動きません。御神輿を遷すと更に重くなり、百人もかゝらぬと、動かぬといつてゐます。

御神幸の日には一の御殿、二の御殿、三の御殿、各三百人以上の輿丁が出て擔ぐので、白い狩衣つけた輿丁だけが千何百人、随分餘所で見られぬ賑やかさであります。

時に宇佐八幡宮の、氏子の住んでゐる宇佐郡は、徳川時代三百年間といふ長い間、天領中津領、島原領と、三つに分れて支配されてゐました。其三領民が相分れて、まわりこんで三つの神輿を擔いでゐました。そこで群衆の心理もありませう、神輿が先きに頓宮に着いた、其地方が豊年といふことをいひ始めましたので、いつか神輿の先着を争ふことになりました。これが今日の喧嘩神事の起りであります。

時に天領の民が、天下様の直領といふわけで、少々威張つたものと見え、中津、島原の私領民の疾視を受け、常に喧嘩腰であつた。これを神幸に持ち込んだものでせう。少数である天領民は、私領の聯合軍に對し、策戦なくては敵はぬ。そこに宇佐郡人根性といふ、負けじ魂を養成したものです。殊に宇佐郡人を代表するのは、其天領、即ち川筋であります。

川筋とは、宇佐郡を縦に流れる宇佐川に沿ふた、沖積層一帯の地で、人も多く、宇佐米の本場であります。

「川筋のものゝねたあとには草もはへぬ」

といはれるまで人氣を悪くしてゐます。又川筋のものは、

「砂原に少便する人間を馬鹿にするな」

といつて、威張つてゐました。

然し此の喧嘩神事が妙な所に、効能を見出してゐます。人口十方に足らぬ宇佐郡ですが、

古來あらゆる人材を出してゐる。尤も政界に耀いた人物を出してゐます。固より政争も劇甚ですが、神幸が黨争心を養つたと見へ、議院制度が行はれて四十年、本縣選出議員の過半は必ず宇佐郡人です、現今も左様です。

如何に先輩が成功してゐても、たよつて行かぬ。負けじ魂？決して人の揮で相撲取らうとせぬ。これも宇佐郡人根性の潔白でせう。又一面神様の餘澤ともいへませう。

さて話は脱線したが、彼の三個の御神輿が、神路山の茂みを分け、雪解れ出る人浪に擁せられて、さしにも廣い馬場を後になり先きになり、練り狂ふて進む。それは壯觀といふよりは、物凄い光景と申したいのです。神輿が上宮を出御して、頓宮につく、其數町の廣場が、一つの演武場であります。これがゼウスの神の前で行はれた、オリンピヤの大祭と同様に、一種の神事同盟であります。斯ういふ御神幸が三四百年も続いたものですから又一面に色々な土俗風習をも、馴致したわけであります。

血を見ずしては止まぬといふ、凄愴を極めた御神幸も、一旦神輿が頓宮に着きますと、歡



呼の聲は神路の山を動かし、輿丁の群衆も、一齊に拍手して御安着を祝し、蜘蛛の兒を散らす如く、退散します、そしてあとは萬燈籠といふ、賑やかな平和な夜の幕となるのです。(まんどろろがつまつて、マンドロロといひならしてゐます)

神輿が二夕晩、頓宮に御逗留になる。すると其晩は何千何百といふほど、神燈がつかますそれから萬燈籠の名もあるわけであります。

其萬燈籠の火の海の中で、盆踊りを始めます、汗だくく、裸で素足で、凄愴を極めた御神幸、がらりと幕は變つて、誠に團欒な場面となります。それが夜の明けるまで、草臥れると氷水の二三杯も飲んで来て、又踊るといふ熱心ぶりです。誠に淳朴な民性の流露であります。

さつき氷や宇佐参り宇佐で

飴かい酒のみ雨乞ひするのが身の祝ひ、

宇佐の横町市郎兵衛さんな闇の

闇の夜にころんで牛の糞つかんで富籤すられ

此んな口説があります。

この萬燈籠に、もつと奇抜な奇習があります。その不夜城の中で、若い男女が、お尻の捻り合ひをやります。どんな澄した人でも、ちよつと手を出して女の尻を捻ねる。時には追かけて捻るといふ、念の入つた捻り方をやる人もあります。捻られて怒り出すものはない筈ですが、年よつた女を捻ると、復讐態度に出て、捻り返すといふ場面も時には見せられます。かの歌垣に歌を詠みかけられぬものは、女の數でないといつてゐた、マンドロで尻を捻ねられぬものは、女の數でないといへませう。それが決して握手接吻見た様に、情交的ではない。其素朴さは確に原始的であります。

宇佐川の上流に、妻垣といふ所がありまして、八幡様の分靈も祭つてあるし、上古の歌垣の行はれた地ともいつてゐる。彼の盆踊りも歌垣の變化といつてゐますが、萬燈籠の晩に行はれる盆踊りといひ、お尻の捻りつこといひ、男女の驩交から來た、歌垣の脱化かも

知れません。

宇佐のマンドロに尻捻ねられて、今にやら／＼痛ふござる、



長洲町は流石は漁村、少し乱暴ですが、シヨウネプトといつて、太い注連縄で女の尻を敲く、お祭りの餘興見た様のことがあります。太い綺麗な注連縄で正月十五日、氏神祭の日に、祠前に参集する若い娘の尻を『今年しや豊年シヨウネプト、お尻を叩け』と呼びかけて逐ひ廻つて敲くのです。其縄を解いて五月に稻の苗をくゝると、稻の根が太るといひ傳へてゐます、シヨウネプトは注連根太の轉訛でせう、敲いて喜ぶ、敲かれて喜ぶといふ鹽梅で、敲かれぬ女は、矢張り女の數に入らぬといふわけです。

さて宇佐の御神事に出て、神輿を擔ぐ輿丁の潔齋沐浴でも、ちよつと餘所に見られぬ、念の入つた遣り方で、他人の飯も婦女子の炊いた飯も喰いません。それから一週間は毎日「潮かき」といつて、海で潔齋します。海のない所では、川に出て水垢離をとる。一族に

死人があれば黒不淨といつて、三年は輿丁に出らぬ。子供が生れると赤不淨といつて、それでも一年は遠慮したものです。輿丁が萬一怪我でもせうものなら、潔齋が足らぬから人も自分もいつて戒めてゐた。

七月七日を「おいろかし」と申して、祭典の御道具を乾かして直す。その日は輿丁共敵味方なく、潮を汲んで、お禮参りをする。そんな所に民族のうるはしさを現はしてゐる。

夏に雨が降らぬといつては、「雨乞ひ」病氣が流行るといつては、「病難除け」根付けがすんだ、取揚がしまへたといつては、宇佐に参る。宇佐に参る足は至つて軽いのです。

雨乞ひなどの時は、「潮汲神事」といつて、一村擧つて、潮を汲み、太鼓や笛の囃子で宇佐に参つて来る。

其潮汲筒の作り方が一寸面白い。決してピンや徳利を利用せぬ。小さい竹を一節ごめにきり、一々紐をつけ、五六本を束ね、柄をつけるのです。潮を汲むと、青い蘆をさし、海藻の白いのや、黒いのをまとわせます。それを携へて参る。賽銭を投じて参る。それより

も潮を汲んで詣る。これ以上の清き心の表現はありません。

も少し變つた参り方がある。それは正月十三日心經會しんぎょう会とて疫病除けやどけの祭典がある。正月の事とて、餅を携へて参り、燎火かりびの灰を眞黒く餅に塗つて歸へります。大きい年玉をころがして黒く焦がして歸る人もあります。



宇佐の御神事は、夏の眞盛りであるが、其反對に嚴冬ひんとう、手足も凍る寒さの時、高田若宮八幡の神幸が行はれます。それが「川渡し神事」といつて、舊曆の師走十五日、月が山端に出て、潮が奔々と江にさし上る頃、奥丁おくちやう數十人が、狩衣かりぎぬ一つをまとひ、神輿を川の中流に擔ぎ入れます、流れに沿ふて、五丁も六丁も練つて下る。見るだに勇壯です。數百の松明が右往左往に入り乱れる。月は上る、潮は湛へる、何ともいへぬ壯觀です。頓宮につくのはいつも夜半、随分變つた神幸ではありませんか。

この高田の川渡し神事に似て、より勇壯な行事があります。豊川村字拜田の、觀音堂の

前で、これも毎年舊正月の四日といふ、極寒の季節に鬼會おに会といふが行はれます。

青年三四十人が素裸すはだかになり、二間ばかりもある松明たいまつをかついで、あの鷹栖の淵を渡り、觀音堂の前で二手に分れ、其松明たいまつでたゝき合ひをやるのですが、右の手に持つ鬼杖おにづえといふ三尺計りの棒で、燃え盛る松明をたゝき、火花を敵の頭から、浴びせかけるのです、壯絶ですが、實は物凄しい光景です。雪は暗の空から、ヒラ／＼降つてゐる、たゝき合つて松明の火が消へると、退いて燃やし、新手が代つて戦ふ。一時計りも撃ち合つて、又松明をかつき、蜿蜒わんくと長陣を作り淵を渡つて歸える。

此の鬼會の御利益で、拜田村には昔から、火事のあつたためしがない。又青年は風を引かぬ。松明の火を浴びて怪我したものは、絶えてないとの事です。

宇佐郡人、即ち十万の氏子、あらゆる生活、神様を離れての生活はありません。随つて敬神崇祖、清廉潔白せいぜんけつぱく、正義奉公、共同一致といふやうな、民性が隨所に發揮してゐます。然し又負け嫌ひの、尤も傲岸さうげんな性質も養はれてゐるやうです。

## (六) 宇佐文化——和蓮和尙

九州は固より、皇國發祥の地ですが、其九州に三大文化の中心があります。其一は筑前の大宰府文化で、次ぎは豊後府内文化、最後が我宇佐八幡宮によつて生れた、宇佐文化であります。

申上るまでもなく、大宰府は上古に於て、大陸文化輸入の門戸、更に九州全島を支配してゐた、官廳のあつた所で、大宰府文化といふがある筈です。

府内にしましても、大友宗麟といふ、大人物が出て、當時南蠻といつた。ポルトガール西班牙の商船を引きこみ、或は天主教といふを弘布させ、學校を興し、會堂を建て、貿易場を設けた程ですから、府内文化もある筈であります。

時に我宇佐には、さうした外來文化を輸入する、土地柄でもなく、又宗麟見た様な、偉

い人物が出たといふわけでもないが、然しお伊勢様に亞ぐ、第二の宗廟と仰がれる、八幡大神がましますので、宇佐文化といふが生れたのであります。

神様の力で生れた文化です。大宰府や、府内の如きものでない、最も特色ある文化が發生したわけであります。

其特徴ある宇佐文化といふのは、美術工藝などのやうな物質的文化でもありません。全然精神的で、永久に日本文化の基調となるものであります。

宇佐にも神息といふ、刀劍家の元祖もゐます。信國了戒といつた名刀家もゐました。それから宇佐八幡式建築、宇佐八幡式鳥居といつたものもありますからして、物質的の文化がないではありませんが、今申す宇佐文化といふものは、西大宰府や、東大分の文化のその様に、一時的に燃え盛つた文化でもなく、永遠に生命を有つ、一種日本民族の信仰となり、民族精神となる、思想的文化ともいふべき意味のものであります。

之を換言して申しますれば、我國在來の惟神の道が、外來の佛教を同化して終つたので

神佛習合、神佛同体、本地垂迹と、いろ／＼言葉はありますが、日本の神様の本地は印度であつて、日本の神様は印度の佛様であつたといふことであります。そこで天照大神も印度では毘盧舍那佛（大日如來）であり、八幡大神は阿彌陀様であると、いふやうになつたのです。斯うした神佛合體思想の發祥地が宇佐であると申したいのです。

印度といふ熱帯に生れた佛様が、荒涼極まる支那朝鮮を靡びけ、永い旅をつゞけ、此花咲く日本へ、新來の客として入國されたのです。來て見ますと、神様といふ、主人公が嚴めしく構へてゐるので、佛様も聊か躊躇せざるを得なかつたのであります。然し神様の親分株である、宇佐の八幡様が一番に出て、佛様を玄關に迎へ、手をとつて「マアお入り遊ばせ」と案内申したものですから、佛様もホツと息をつき、腰をおろしたといふ、恰好であります。

乾燥した男世帯の家に、新裝の新妻が這入つて、新世帯を作り、新春を迎へたといふ鹽梅でありました。

然し、日本の宗廟と仰がれる八幡様が、印度の蕃神と手を引き合つたのは、間違つてゐることだと、痛くあげつらうものもありますが、これは淺間しい人間のいふことで、衆生濟度が神様でも、佛様でも、本願でありますし、御神慮の那邊にあるかを人間の智恵で、推し測つても當りますまい。

八幡様は進んで佛様をお迎へする筈です。最初宇佐の菱形池の邊に、ありました、其時に、「我名は八幡大菩薩」

と、神様の様な、佛様の様な、御名をお名乗りになつてゐられます。神様の御威光に、佛様の御慈徳を兼ね合はせてゐられたことが、窺へるではありませんか。

これから凛々しい、神様の威力をお示しになり、輿にお乗りになつて、千軍萬馬を統べられ、遠征の途に上るかと思ふと、暖かい御慈悲を以て、佛菩薩のなさる行事を行はれてゐる。じつと鉦蔭に拜まれ、觸るれば崇たるといふ、鉦神様ではない、威武と慈悲とを兩

手にもち、積極に活動された、神様の中の眞の神様でした。

八幡様の尤も親まれた僧ぼんさんに、法蓮和尚といふがあつた。僧侶ぼんしんとして、本郡に始めて這入た人は此の法蓮さまであります。まだ奈良の大佛も何も出来ぬ其昔、文武天皇の大寶元年に、錫じやくを我郷土にとどめ、彼の鷹巢の觀音堂など建立された、本當に郷土草創の恩人であります。

神様は固より善知善能であらせられる筈ですが、八幡様は此法蓮和尚に師事してゐたともあります。和尚は常に八幡様の身邊を離れず、何かと相談に與つてゐたものであります。宇佐郡連山の中の和尚くわしやうとは、此法蓮和尚が住んでゐたから其名があり、到る所で寺も建て、佛像も刻み、又醫藥を人に施したといふので、大寶三年には朝廷から、宇佐の田四十町を賜ふとか、養老五年には、宇佐の君みといふ姓ぐんねを下さつたとか、堂々と國史に記されてゐます。

八幡様が日向征伐をなさるといへば、一番に法衣をつけ陣頭にたち、神軍の總帥そうすいで出か

けてゐる。凱旋して、放生會といふ佛様のなさるやうなことを行はれる。或は此法蓮の計畫であつたかも知れません。

彼の日向の隼人征伐ですが、時は元正天皇養老四年、まだ八幡さまは小山田においでたとき、固より、御勅命は國司くにのみに下つたことでせうが、八幡様の神輿が先途にたち、彦山權現もお連れになり、彼の法蓮が神策かみさくを運らし、神様と佛様が、手を携へ、神官と僧侶とが鉾を並べて出征したといふ、珍現象な征伐でした。神軍向ふ所敵なく、直ちに七城を下し多くの兇徒を誅し、凱旋になりました。凱旋になると、持つて歸られた、兇徒の首級くびを厚く葬り、今も凶首塚きゆうしづかと稱ななへ、爲めに百體殿を建て、其靈を祭り、遂に放生會まで行はれたのであります。

此日向征伐から還へつて五年目、神龜元年に、八幡様はかういふ御託宣をお下しになりました。

神吾は前生に於て三韓を征し、乾珠ひたまみたま満珠を海に投じ、多くの魚介を失つた。今又大隅

日向の隼人を殺した。これらの靈を慰むべく、「最勝王經、放生陀羅尼を讀みたい」と仰せ出された。

それから今の和間の濱、浮殿に頓宮を建て、年々御行幸になり、蜷といふ貝を沖に放つのです。兎徒が蜷に化したといふので、蜷を放つのですが、今の蜷木村はその故事から來たのです。

宇佐八幡宮では、年中色々な祭典儀式が行はれてゐますが、この放生會が、最も重義な年中行事で、當初の導師は、法蓮でしたが、明治の神佛分離に至るまで、導師講師は黒衣の僧侶でありました。神様と佛様、眞に仲のよい話でした。

和氣公

村上佛山

清矣清麻呂

抗言挫老髡

非君擊日月

被彼撻乾坤

千載忠臣跡

敷家和氣村

維舟石捐石

再拜定消魂

## (七) 神宮寺の濫觴

それから八幡様は、境内に大伽藍を建てさせ、昵親の法蓮を住ませ、朝夕お經文を讀ませて、お聞きにならうといふのです。少しお話を戻さねばなりません。

或日、北辰といふ神様が來て、語り出した。

「私も此小倉山に住ましてもらつて、御一緒に法界の衆生を利益いたしませう。時に此山から西に當つて、彦山といふ名山があつて、權現様がおいでになる、そして其權現様が、珍しい寶珠をもつて、一切衆生を濟度してゐる。其珠を此方に譲り受けたいものではありませんか。」

といつてゐた。すると香春の明神も來て、

「其彦山權現の寶珠を是非、お譲り受けなさらねば、衆生濟度が出來ぬ。一つ一緒に

出かけませう。」

といふ、彦山では法蓮和尚が、其寶珠を得べく、石窟に籠り、十二年の間一心不乱に、金剛般若經を轉讀し、法樂を備へてゐた。すると一匹の斑紋はんもんある、俱利伽羅くろがら（小龍）が、光明赫灼くわくやくたる珠を口に銜かんで現はれた。法蓮歡喜至極、涙を流し、袖を延ばし其珠は受け取つたが、龍は消えてあとかたもなかつた。

そこに八幡大菩薩は、白髮の仙翁となつて、

「其寶珠は年來奉仕したいと思ふてゐる珠である。此翁に渡して呉れ」

といへば、法蓮大に怒つて、

「これはたやすく人間に渡すべきものでない、」

と言ひ放つた。すると翁は

「僧は三歸五戒ををさめながら、珠を惜しむとは怪あやしからぬ。」

といつて消え失せた。翁の去つたあとで、袖を見ると珠は全くなかつた。法蓮は早速、般

若の印いんを結び四方に投じ、火界の眞言を唱へると、仙翁は遂に火宅におちて、動けなくなつた、猶法蓮は山上より仙翁を呼び返へさうとする。

すると仙翁は、靈を現はし、金色こんじきの鷹となり、金色の犬をつれ、其山に歸へり、法蓮に物語つた。

「吾は八幡大菩薩である、此寶珠を吾に與へよ、此寶珠を以て一切有情を利益せう、

もし宇佐の地へ垂迹したならば、汝を神宮寺の別當に迎へ、此珠の恩に酬ひやうから、

同心して天下靜謐、衆生濟度に盡して呉れ、」

と和興わきょうして、珠を譲り受けて還へられた、と申します。

時に聖武天皇神龜二年正月廿七日でした。

「神吾は衆生を導かんために、藥師彌勒やくしひやくの二佛を以て、本尊となす。」

といふ、有難い御神誥があつた。其由を奏聞しますと、直ちに勅使も下向して、今の日足の里に彌勒寺といふ、大伽藍が日ならずして建つた。すると八幡様に奉侍してゐた、大



神比義といふが、同じ日足の里の南無江の林に薬師寺を建てた。すると前約履行で、法蓮が来て彌勒寺最初の別當となりました。

時に彌勒薬師の二寺が創建されて十五年目、天平十年五月十五日、此日足の里から、いよく宇佐の境内に移轉しました。

其移轉と同時に薬師寺は金堂と改め、彌勒菩薩丈六の尊躰を刻ませ、無着、世親の脇士も作つた。今極樂寺に安置されてある、黄金佛は其時のものだといつてゐます。

此彌勒寺こそ、全く本邦神宮寺の濫觴であります。それから全國各神社に神宮寺といふを、境内に並べ建て、神官と坊さんとが、同じ鍋の飯を喰ひ、袈裟をかけ、如意を携へた坊さんと、装束をつけ、笏をもつた神人とが、神前に羅拜して、一方には嚴かな祝詞を誦し、一方には珠數をもんで、お經を讀んでゐるといふ、眞に奇妙な現象を呈することになりました。

宇佐では、上宮の勤めは専ら僧侶之に任じ、神官は下宮から、お秋ひをしてゐたともい

つてゐます。こんな時代もあつたものでせう。

## (八) 仁聞菩薩

又茲に、神とも佛とも、人間とも正躰の分らぬ、聖僧が一人ゐました、其名仁聞、それが全く八幡様の化身だといふのだから面白いのです。

八幡大神全く僧形と身を變じ、彼の馬城の峯華頰の窟で修業の功を積み、燒身の行など修め、國東半島六郷の地に、法華二十八品に像り、二十八の精舎を草創し、法華經の文字の數、六万九千三百八十餘体の佛像を刻み、二十八山、九十九ヶ所の靈窟、一百餘院の室に安置した、とは餘りに名高い話で普く人口に膾炙してゐます。

さて仁聞菩薩傳、餘りに潤飾に過ぎ、うつかり信用されぬといふ向きもありますが、其

仁聞の作品だけは、確に宇佐文化の一面であります。郡内の古刹、仁聞の作を安置してない寺はないのです。日足の里地藏院の木目不動は、其無数の聖作中で呼びものとなつてゐます。

近來豊後臼杵に例の石佛が掘り出され、頓に名高くなつて來ましたが、これも宇佐八幡を中心とする、本地垂迹説から流れ出たものです。其臼杵石佛と少し手法は違つてゐますが、仁聞作の石佛といふが、近來宇佐文化の一として研究の好題目となつてゐます。

宇佐を距る東南二里、津房溪猶本に、二王、不動、薬師、釋迦の諸像を上段に、下段には十六神將及び十王などの靈像が大磐石に陽刻してある、一大靈場があります。其姿勢刀法とても非凡、風霜の變に逢ひ脱落してもゐるが、現存するもの三十七軀、さゝやかな溪流に臨み、古木畫暗く、閑寂の境、こゝにもまた宇佐文化の泡沫があつてゐます。

安心院の下市不動山の石佛十三軀もこれと同系半浮彫である。同じく仁聞の作と稱し、當年信仰の産物であります。

探れば、黒村天福寺の巖龕、龍王の仙岩山、山本の虚空藏寺などの古刹には數へきれぬほど、面相も何も分らぬ木佛が納まつて皆仁聞作と、廣大無邊に有難がつてゐる。

西都甲村は天念寺の六躰、田染村富貴寺の八躰、同村眞木大堂の三體は、既に國寶佛として保護されてゐるが、皆仁聞の作となつてゐます。



近來頓に尙古趣味が普及して、何處のうちにも古瓦など愛藏してゐる。これは法鏡寺の唐草だ、イヤこれは虚空藏寺の巴瓦であるの、これは宇佐彌勒寺の蓮紋瓦だといつて重寶がり、床に飾つて喜んでゐます。

奈良あたりでは、古い瓦の破片を店頭に出して賣つてゐる。宇佐でも、もう拾ひ盡したのが、宇佐土産の一つとして、布目瓦の一片を、拾つていつたものです。

宇佐に杖を曳かれる人に、是非探つて貰いたいの、一千年の歴史をもつ、彌勒寺の礎石、これだけは探つて下さい。金堂、經堂、講堂それから、東大門の礎石が當年をさゝやい

てゐます。

### (九) 奈良の大佛と八幡大神

奈良の大佛、あの大佛も、お八幡様の御助力オカサツキで出来たのです。實は天平十三年に、聖武天皇がお勅使をたて、宇佐に大佛成就の御願をこめられました。すると八幡様が、

神吾カミミ、天神地祇を卒ソクひ、誘ユひて必ず大佛の功を成し奉らん、銅の湯を水となし、吾身を草木に交へても、障サマることなくせん。

といふ託宣があつたので、やがて神輿に奉じ、多くの神人僧侶がお供して、山を越へ、海を涉り、長の道中を歩き續けて、奈良の都にお着きになつた。都でも八幡様の神輿を迎えて、主上百官も大に力を得、日ならず大佛は出来あがつた。かれこれ一年餘りも逗留し、

宇佐へ御還幸になつたが、あとに手向山八幡とて分靈を祀り、大佛守護神となつてゐる。

奈良へ御滞留中の事であつた。主上には大佛塗料の黄金の不足を告げたので、大唐に求めることにして、八幡様に海上の平安を祈願したのです。すると八幡様には、

求むる所の黄金は、將に國中より出る、大唐に使を遣はす要なし。

とお告げがあつた。すると果して天平二十一年正月、陸奥守百濟敬福といふが、陸奥國小田郡から出た、九百兩の黄金を献納した。主上には神誥に痛く感じ、其内百二十兩を、宇佐の神宮に納め奉らしめた。

今日三つの延べ金が、寶藏に納まつてゐる、宇佐では之を敬福金とも又、黄金御正體ともいつてゐます。

更に水銀の缺乏を訴へ、八幡宮に祈つた、するとこれも近江の國に湧き出たので、其三升を彌勒寺の寶藏に納め水銀靈像と稱したのですが、今は名ばかり何も残つてゐない。

此時は黄金水銀だけを納めたのではなくて、銀の香爐とか、念珠とか、錫杖など、佛様

の御道具を、澤山奉納したらしい。神殿に佛具を備へ、神様を全く佛様扱ひにしたものであります。

## (一) 僧形八幡

大菩薩とお名乗りなつて發現し、法蓮和尚に戒を授かり、仁聞といふ聖僧に生を托して佛道を修め、放生會などの御行事を遂行し、既に神佛同體の實を現はし、大佛鑄造の工事に參與し、神社も佛閣同様に取扱はれてゐるのに、更に最澄空海といふ、平安朝の代表聖僧が宇佐に参り、神殿を全く佛舎扱にして終つたのです。

弘仁五年、最澄大師が入唐に際し、宇佐に参り、海上の無事を祈り、千手觀音を刻み、法華經を寫して納め、法華八講といふ、有難い法會を修めたとあります。

弘法大師も宇佐に参られ、眞言の法味を献じた。すると八幡様がお姿を現はされた、大師は其御姿を寫し、更に木像を刻んで寶殿に納めたとあります。

弘法大師の刻んだ神像は、どんなのか分りませんが、此頃からして八幡様の御神像を、僧形に刻むことが始まりました。現に奈多八幡の御神體は、僧形八幡であります都が、都の方では中々僧形八幡の神像が流行しまして、奈良の藥師寺の鎮守八神宮に奉安してある、三體の神像と、東大寺の僧形八幡の神像とが、典型的のものであります。

この東大寺のは、建仁元年、佛師快慶の刻んだので、高さ約三尺、木蘭染の法衣を着け、右手に六環の錫杖をもち、蓮座の上に座してゐる。地藏菩薩の形式により、當代の垂迹思想がすつくり象徴されてゐます。

皆それが國寶になつてゐる。熊本の藤崎八幡宮の僧形八幡像も、やはり三尺ばかりある座像で、國寶となつてゐる。

八幡様も全く御姿を佛様に變じて、衆生をお濟度になつた。これについて考へ出すこと

は、彼の大神比義が八幡様御發現の時、三尺の童子となつて現はれたといふのを、土で神像を作り、神殿に納めたとあります。それは僧形ではありませんまい。又若宮八幡の御神像、既に國寶と指定されてゐる五體の木像も、神像であらせられるといへば、八神様の御姿までを二様に、一は神像に、一は佛體に造られてゐる。神佛兩面で衆生に接するといふ、其思想はこの弘法大師が法躰御影を感得したといふのに、始まるものであります。

八幡様が餘り佛化して終つたといふので、唯一神道學者などからは、痛く攻撃されてゐます。

各地にある八幡宮は神社の形體を具へた佛刹である。

といつて見たり、

あの託宣集は、佛者が神佛混合を計つた記録である。

八幡大神は應神天皇ではない、應神天皇であるといふのは、佛徒が佛教弘布の手段として行つた、偽瞞手段である。

など、随分ひどいことをいふてゐる。何といつても怒つてもゐまい、又何といはふとも神様の御威光には關係するわけのものではあるまい。

鎖國攘夷論者から見れば、開國進取を危険視するだらう。積極態度の八幡様から、排外思想に囚へられてゐるものを見たならば、惘然に思召したであらう。

何にしても、神佛二教が渾然融合して、大和民族の精神生活、信仰生活を圓熟ならしめ、日本文化に貢献したことは、宇佐文化に負ふ所大といはねばなるまい。

## (二) 和氣使と宇佐文化 附男山八幡

耶馬溪を天下に紹介したのは、いふまでもない、頼山陽でせう。宇佐八幡をして、皇室の宗廟といはせるまで、全國民の崇敬の中心としたのは、和氣清麿公の神勅からでせう。

これまでもそうであつたが、清麿公の神勅の事があつてからは、吉にあれ凶にあれ、國家の大事變には、必ず勅使を宇佐に下し、幣帛を奉り、吉には神徳を謝し、凶には安泰を祈つたものである。

其勅使が和氣公の子孫に其人のない時は、他から選任したこともありますが、清麿公の子孫が殆ど、一手専任であつたので、和氣使と稱するやうになつた。和氣氏で勅使に立つた人を約三十三人ばかり數へられてゐます。

實は櫛の齒をひく様に、往復したのですが、延喜帝の御代から、三年一度の恒例となつたが、其實贖歳こくさいなしであつた。其中でも甲子かのねの勅使は六十年ぶれにたつので中々有難い事にいつてゐます。紀念に植ゑた松を勅使松といつて、都から携へて來て植ゑたものです。

最近の元治甲子げんぢの勅使がたつたときなど、どんなに騒いだものでせう。勅使逗留五日間は、町内禁酒勵行、寺は鐘太鼓の鳴物禁止、勅使通行のときは、土間に平伏せよとのお觸れであつた。通過道中の墓や寺は薦こもで被ふたとあります。

大正十三年の甲子の勅使は、時局のため二三年延ばされたが、以後十年一度に期を縮めたとの事です。

その送迎に違なかつた、宇佐使によつて、八幡様の御威徳はどれ位宣傳されたか分らぬ。又宇佐文化に厚い金箔を塗つてくれたか分りません。



時に清和天皇の時でした、大安寺の行教といふ坊さんが、八幡様を京の男山に勸請申してから勅使も宇佐まで來ず、男山ですましたこともあつたらしい。其行教和尚である。貞觀元年宇佐に詣つて、一夏九旬、晝は大乘經を讀み、夜は密教法を誦し祈念する所があつた。すると八幡様が大に悦ばれて、

神吾、久しくして法施を受けた、汝王都わづに廻かへらば吾を王場の側に居まけ、皇祚を無窮に護らん。

といふ御神語を受けて、彼は宇佐を出發した。山崎につくと、男山鳩峯とよたけのあたりに靈光を

認めた。いつて見ると唯山鳩が群集するだけであつたが、新祠を設ける恰好の地であると奏上して、宇佐の祠規に準じて、祠殿を建て、八幡大神を勧請申した。そこで八幡大神も王城守護の神となり、一段皇室の尊崇を厚くしたのです。

時に口善悪なき一流の人は石清水八幡は佛性神殿の魁である。八幡宮を、佛刹抜ひにしたのは、全く行教だと、いろ／＼なことをいつて、彼を矢玉にあげ、詰つてゐます。これも神佛分離の今日から考へた思想であらう。

### (三) 平宗盛社頭に武運を祈る

八幡様は非常な財産家です。日本一の大地主でありました。其財産台帳ともいふべき、記録があります。それは宇佐大鑑のことです。大鑑で見ますと、筑後の小家庄に四十三町

だとか、筑前の野津手浦に三十五町、日向にいくらと全九州に亘り、大變な土地を、然も税の出ぬ莊園を領有してゐる。それが皆寄進田であるから、八幡様の信仰程度も推し測られるが、其財産を保護するために可なり多くの兵も養つてゐたらしい。武士を向ふに廻して、合戦でもするだけの、兵力を有してゐたのです。

治承養和といへば、平清盛が榮華を極めてゐた時代、時の大宮司宇佐公通といつた人は、清盛の女婿といつてゐたが、豊筑對三州の太守である、平家の探題格で、大いに羽振りを見せ、各地に勃興する源氏の動靜を一々六波羅に注進したものである。

九州の住人、菊地高直、原田種直、緒方惟義續いて、臼杵戸次、松浦黨など、謀反をおこし、東國の頼朝に與力申しけり、

云々と飛脚を以て報告してゐる。九州は平家の勢力範圍なのに、新興の源氏に急に鞍替へしたものが多く、又この八幡様が源氏の守護神となつてゐるので、驕る平家がやがて窮地に陥ることになるのです。

平家は、御大宗盛が安徳帝を擁して、西海に落ち、壽永二年八月太宰府に着いた。すると豊後の緒方惟義といふが、其兵三万を以て大宰府を攻め落した。

宗盛、もう此上は宇佐八幡に武運を祈る外はないと、主上を奉じ、柳ヶ浦に引還へし、宇佐につき、祈願をこめることになつた。主上は、大宮司公通が館を行宮として、日毎御通ひになる。宗盛は神寶神馬を奉り、誠意をこめ、社頭は月卿雲客の居所、廻廊は五位六位の官人が相つめ、庭上には四國鎮西の兵ども、甲冑弓箭を帶し、雲霞の集ひ、折から九月十三日、明月の夜とて、神殿で各々歌を詠まれた。

月を見し去年の今宵の友のみや、都に我を思ひ出つらん

忠度

戀しさよ去年の今宵の夜もすがら、月見し友の思ひ出つらん

經盛

君住まば爰も雲井の月なれど、猶戀しきは都なりけり

時忠

名にしあふ秋の半も過ぎぬべしいつより露の霜とかはらん

行盛

打解けて寝られざりけり掛枕今宵の月の行衛清むまで

宗盛

と昔の思ひ出、各々口ずさみ、更に管絃を取出し、神慮を清め奉らうといふのである。折も折、杜蔭にドツト関の聲を揚げるものがある。宗盛始め一門では、又しても緒方の軍が押寄せて來たのかと、社頭は一騒ぎ、琴を折るやら、笛を割るやら、總だちとなつて騒いでると、攝津藏人が駈けつけて、

待たれよ、暫し、今日は敵の襲來ではない、景清めが手勢五十騎ばかり、鳥居のあたりで、戦争の演習をやつてゐるのです。

と聞いて、宗盛おこつた、

渠を連れて來い、怪しからぬ。斯うして神慮を慰めつゝあるに、何なれば斯く人を驚かす、疎けもの、

と怒つてゐる所に、景清がやつて來た。宗盛、目をむいて、

無神經も程がある。皆名残の月を賞し、神慮を慰め、且つは敗戦の疲れを、絲竹管絃に散ぜんとしてゐる。何と考へ人を驚かすぞ、



と敗將でも、一門の總帥、大に叱りとばした。景清ちつともこはくない。ドツカと腰をすへての諫言。

「アハ、イヤ御尤、然し打續いての敗戦、御大將の心情お察し申す。傾く武運、是非ない事であるが、太宰府などでは、敵の旗色さへ見ず、一門の知盛様、教盛様をも打ちすて逃亡、山鹿の城でも一矢も酬ひず、辛らうじて此地に遁れ、宇佐八幡宮に御祈願はよいが、絲竹管絃に耽けられるとは、奇怪千萬、今しも敵勢が寄せて來たら、斯うして一方は防戦せうと、兵を訓練してゐた所であつた。大將殿の御氣に觸れたことは、痛み入つて御座ります。

とサラ／＼と辯じつくし、且つは諫言申上げた。すると宗盛返す言葉もなく、手持不沙汰で奥へ這入つた。

蕭條の秋は更ける。こんなことがあつてから一門は、益々淋しい思ひに沈んでゐる。

一七日は満願の日も來たが、一向御受納の様子も見えぬので、七日の夜半、宗盛一首の歌

を詠じ、神前に捧げた。

思ひかね心つくしに祈れどもうさには物もいはれざりけり

と、これ程祈請をこめてゐるにと、不平らしく訴へると、神殿に物すごい聲がして、

世の中のうさには神もなきものを心つくしに何祈るらん

とあつたので、宗盛はじめ、一族の面々、ワツと泣き出した。傾く運命、今は神様にも平家を見捨てられたかと、一門悲嘆の餘り顔見合せてゐた。宗盛も堪えかね、

さりとはと思ふ心の虫の音も弱りはてぬる秋の暮哉

と詠んで悲鳴を揚げた。左中將平清經の如きは、最早頼みなしと柳ヶ浦の沖に身を投げ空しくなつたといふ。

黎明告ぐる山寺の鐘も、平家凋落の進行の曲？

其夜の明けんとする頃、知盛の使者、監物太郎頼賢、宇佐の行在にかけつけ、注進に及ぶ。

九州は逆臣ばかり、味方とてなし、それより讃岐國屋島は究竟の地である、行在所を

此處に設けたい。云々

そこに盛綱忠光が、數多の兵船を用意して來たので、宗盛始め一門大に悦び、主上を奉じ彌々宇佐の地を後に出帆された。

### (三) 宇佐公通卿の事業

時に、行在所であつた、宮司公通の館は八幡村森山にあつたのですが、随分大規模な館であつたらしい。現に其墓が森山安樂院の境内にあつて、「大宮司豊筑對三州太守天宮公通大居士」と記してありますが、其墓の前は、昔の御藏道路せくらじどうで、往復頻繁でありましたが、馬に乗つて通ると、必ず崇つたものであるといつて、今日まで畏敬してゐます。

又畏敬おそされる譯がちやんとあります。それは豊筑對三州の太守で輝いたのではない、此

土地を開發して、民衆をお救ひ下さつた恩人であります。

大分縣最古の堰、大分縣最大の堰として、歴史ある平田堰は、全く公通卿の濟民的心事によつて出來たものであります。

濃味な民、まだ池を鑿ち、堰を築き、灌溉するの智識はない。ほんの天水を待つて稻をうるてゐた。雨露の恵みがなければ、直ぐ田は枯れる。公通卿之を見て、平田堰築渠のこを思ひたち、其成功を神に祈り、應栖山は圓通大師の堂に籠り、祈願をこめますと、其満願の曉、

爾が庶民濟度の志厚きを嘉みし、祈願を成就させる。この川上から、白木の筥が流れ下る。其住ままる所に井堰を築け、其筥の蓋をとれば白蛇十二頭が出る。其往く所に隨つて渠を穿てば、通水自在である。」云々

といふ神話に接し夢は醒めた。見れば果して白木の箱が流れてゐる。其蓋をとると、正しく白蛇十二匹むと這ひ出た。其行く跡を追うて、渠を鑿つていつた。二匹は四日市の吉

松でとまつた。之を有瀬大明神に祀り、次の二匹は更に進んで城井にとまつた。今の有吉大明神は之を祭つたのである。餘る八筋は八幡村の森山、即ち公通卿の館のあたりにとまつた。之れが蛇田神宮に祭られてゐる。現に三社共、平田堰鎮護の神として、年々祭典が行はれてゐる。もしか旱害でもあれば、此三社の神輿を鷹巣まで擔いでゐつて、雨乞をすることは、今日も行はれてゐます。

水路延長七里餘り、灌漑面積二千町歩、公通卿の子孫に姓を平田と稱するものがあつて、代々井手庄屋となつてゐた。

### (四) 緒方惟榮黄金三體を冒す

雨か霰か定めなきは冬の空、時に彼の大宰府を攻め、平家を走らして、源家に勳功を樹

てた、豊後緒方の莊司、緒方惟榮が宇佐八幡宮を焼討したといふ、奇怪事がある。

其緒方惟榮といふは、宇佐神領緒方莊の庄司である。所が、一向貢物を納めぬ。治承四年以來領主の神宮に對して、濟物を押領し、敵意を示してゐる。大宮司公通卿は、田邊妙盛を遣はし諭さしめた。

人間盛んに神敵はず？ 彼の惟榮、兵を擧げ宇佐に攻めて來た。宇佐では、城井種遠其子公總といふが、公通卿の爲め、姨田の狐坂（今の縁有坂）に陣を構へ、元暦元年は七月、緒方勢の侵入に當るといふことになつた。七月は六日白杵、緒方の大軍が押し寄せて來た。城井軍衆寡敵せず、蹂躪されてしまつた。

同日未の刻、其勢を以て宇佐に雪解こんで來た。鬼と人間との戦争、神人どもは神輿を奉じ、横山の谷に逃亡した。

すると緒方の暴徒、宮中に乱入し、神殿を破り、神寶を掠めるやら、神人社僧の宅を焼き拂ひ、掠奪三日、木の葉一つも残さず、浚らはれ、清淨を極めた宇佐神域、全く焦土と

化し去つた。

此上は進んで城井城を屠り、暴威を逞くせんとして、城井城を取り圍んだが、種遠必死で防戦したので、城を落すことが出来ず、又しても宇佐に引還へして來た。横山谷から歸えつて來たまゝの、公通以下の神人、神輿を奉じて、今度は深見の山奥に遁れた。

これにつけ勿體なく思はれてならぬのは、聖武天皇が神宮へ納めた、敬服金、其黄金三體まで掠められたのである。すぐ其一體は鞍の飾りに鎔かされ、一體は大宰府、參河守範頼に献上した。範頼など、よい代物が手に入つたといふわけで、宇佐宮の銀細工、源三守弘を召して、太刀に鏤ばまうとしたが、守弘が申すに

「これは宇佐の宮の神寶、之に何と手がかけられよう、畏れ多い」

と聞いたので、範頼は其まゝ居合せた公通卿に返えしてくれた、残る一體は、豊後守藤原頼經から、後鳥羽院に献じ、院は更に石清水八幡に奉納してあつたが、同三年十一月十三日、和氣定康が勅使として、下向の時に、無事本殿に歸えつた。緒方が鞍に蒔かせんため

鏽崩したのは、別に公通卿が代りを作つて、納めたといふことになつてゐる。

然し斯うした戦塵もをさまり、世は源家の治となりますと、神人共も歸へり、神宮復舊に盡しましたが、元暦二年二月五日三河守範頼兄の命を以て、宇佐宮に奉幣して、麻六百三十反を献じ、院宣及び頼朝の教書で、神領も復し、翌年七月には假神殿の造營も出來、文治四年には正殿も出來て、面目を一新したといひます。

月日流れて七百年。此時に參河守範頼が、宇佐宮への祈願の願文を、今日之を手にして視ることが出來ます。光輝ある宇佐神宮史、固より一片の偶話傳説を集めた稗史の類ではないのです。

### 龜山

### 耕雲

末の世は君にひけとか龜山の宮木を神はまもりおきけん

宮つくり昔にあへる龜山は浮木にあへる御代のためしか

## (五) 大友義鎮の暴舉

かの緒方惟榮に焼討ちされ、固より焼け太りしてゐたこと、思ふが、又しても大友宗麟に焼討たれた事實があります。然し八幡様も持った財産に禍されたともいへませう。緒方とて年貢を嚴督されたのに業をわかしたらしい。大友氏も神兵を出せと催促して來たのに、宮司が之に應じなかつたからです。神宮も兵を以て仕末するだけでも、持った其財産が、禍したといへばいはれるわけです。

近來大友研究の人達は、「大友は決して、神社佛閣を破却したものでない。寧ろ寺を建て、神佛を信仰してゐると辯護してゐます。それは本當です。然し宇佐と、それから彦山とを焼討ちしたことは事實です。

時に大友宗麟は九州併吞を理想としてゐる。そこで順序として先づ豊前を打磨ける必要

があるといふので、我宇佐郡の龍王城に莅み、先づ宇佐八幡宮の冥助を、得なくてはならぬといふことに想到したので、龍王城から、直ちに重臣吉弘嘉兵衛を名代として、祈願をこめさせることになつた。

嘉兵衛、扈從十騎と、献納すべき神馬三匹を麗々しく粉粧させて、宇佐八幡へ代參し、武運長久、豊前發向につき首尾よく目的を遂げさせて下さいと、祈誓をこめて、龍王城に引還へしたことがある。すると此祈願は早速効顯して、宇佐郡三十六士は袖を連ね、龍王城に伺ひ、犬馬の勞を執ることを誓つた。大友公刃に血ぬらずして、宇佐郡を靡けたのです。

すると大友が一番に攻めなくてはならぬ、馬ヶ嶽城の城主、拔親清といふも、宇佐に使者をたて、戦勝の祈願をさせた。其願文が頗る氣拔である。

それおもんみれば、八幡大菩薩は、聖代の宗廟、武家の守護神、縁にふれ化を分つといへど、妄りに非禮の典をうけず、慈を垂れ生を利すといへど、非道にくみせず、今

祈願する所の意趣は、豊後の太守大友義鎮、ほしいまゝに猛威を振ひ、我土地を脅かさんとす、是を以て一戦に及ぶ、然し彼は多勢、我は無勢、敢て勝利を望まず。縱令命を陣頭に隕し、骸を戦場に曝すも、更に悔あらんや、唯願くは弓馬の道に瑕瑾なからんことを、伏して乞ふ云々

弘治二年丙辰九月

源 親清 敬白

決して無理な注文ではない、勝たしてくれとはいはぬ、然し何といつても八幡様は敵味方から引張り風であつた。

間もなく大友勢が寄せて来て、馬嶽城を取り圍んだ。すると奇怪なことがある。天の一方俄にかき曇り、烈風まき起り、黒烟あたりを籠め放螺貝が鳴り、閃の聲があがる。攻め手の大將田北、朽綱之は不思議だと、逡巡の態である。里人に糾くと、里人がいふ。

城主が専ら八幡宮を信仰してゐるから、必ず神靈のなす業であらう。

田北がいふ。八幡様を信仰することは、親清一人でない。と祭壇を設け、幣帛を捧げ、馬

から下りて、一同に祈念すると、又不思議だ。其の烈風漸くをさまり、霧も晴れ渡つたのです。親清は八幡様の靈夢により、鸚鵡能くいへど鳳凰にかなはぬと、大友に降意を通じ、龍玉城に降禮をとつたといふ。八幡様も相方に面目を立てさして、遂和解に導いたのです。

大友勢は一旦龍玉城に引揚げ、兵を休め、更に小倉、門司の毛利勢を粉碎しようと、永祿四年七月十五日、宇佐大宮司公建にも従軍せよと、軍催状を發した。

すると大宮司公建、何か恃む所があつたと見ゆる。出兵を承知せぬだけでない。使者を盛んに罵倒したらしい。

大友義鎮ほどのもの、城内の叛人を容赦がならうか、早速討手を差向けた。田原近江守紹忍、臼杵越中、吉岡内藏、三千人を率ひ七月二十日押寄せて来た。

神兵郊外に敗れ、退いて社頭を守り、華表瑞垣を楯に必死の防戦、寄手は先づ大宮司の館に火を放つた、すると其猛火八方に擴がり、本殿以下、社殿一字も残らず、百五十字咸く烏有に歸し、境内の社家、寺家、肆店數百戸類焼し、全村焦土と化して終つた。誠

に慘澹たる光景となつた。

其紅焰天を焦し、火の海となつてゐる所に、山鳩數千羽、社頭に現はれ、荒れ狂ふと思ふと、やがて天柱も摧ける計りの音響がして、大ぐれの暗となり、暴風大雨さへ起り、梢を折り枝を飛ばし、加ふるに雷霆鳴動し、地軸も崩れん計りである。寄手も之を見て大に懼れをなし、右往左往に逃散して終つたといふ。

大友氏も斯うした暴擧を敢てなす。騎虎の勢、餘義なきものでありましたらう。

### (六) 大内、黒田、細川三侯の敬神

伊勢大神宮は二十年ぶれに建ち替はる、宇佐も之に準じて三十年ぶれに建ち替つたものである。

然し世が傾けば是非がない足利時代となつては、其式年遷宮も空文となつて終つた。そして此全國崇敬の的となつてゐる、宇佐八幡宮が、可なり何度も祝融の災に罹かつてゐる。一條天皇の寛弘六年に、寶藏の焼けたのが、神宮火災史の新記録であつたらしい。それから後一條天皇の治安二年に、三個の本殿が皆火災に見舞はれた。これが本殿焼失といふ、不祥事の始めらしい。其後、建長五年、延慶二年、大永三年、天正四年、と數度本殿を烏有に歸せしめた。といふ悲惨事を繰返した歴史がある。最後の享保の炎上と來ては、誠に慘鼻を極め、猛火があらゆる殿堂を嘗め盡したのです。殊に大永、享保の二度の炎上は、境内にあつた人家の失した兇火が、飛火して、莊嚴極める上宮まで、類焼の禍にかけたのである。即今防火設備の議が、どこの宮にも寺にもあるが人家を遠ざけることも、防火上の喫緊事であらねばならぬ。



元暦の緒方惟榮、永祿の大友義鎮の如く、宗廟の神威も恐れず、人を悪んで神に仇した

ものもある。之に反対して同じ豪族でも、山口の大内氏は歴代頗る敬神崇佛の念深く、我豊前に手を伸すと、人心懐柔の手段もあつたであらうが、到る處の宮寺に喜捨した事實がザラにある。

宇佐八幡宮への寄進など、どれ位あるとも知れぬ。神馬の献納などは何度もある。殊に應永二十三年の造營の如きは、大内氏一己の大寄進で、今日まで夏の御神幸に練り廻る、三個の御神輿の如きも、皆大内氏が敬神といふ清らかな心の顯はれと景慕してゐる。

宇佐宮へ祈願で名高い史實は、和氣公が神勅を受けたそれ以上のものはないが、平宗盛が、主上を奉し社頭に武運を祈つたことは、宇佐史錦上の花かも知れぬ。

それからして皇室より年々お降しになる、和氣使甲子の勅使等の祈願は、やゝ恒例的の感がする。それよりも元暦二年に源範頼が宇佐へ詣で、天下太平、國土豊饒を祈つたり、建治元年に北條時宗が元寇につき、異國降伏の祈禱したといふ。さうした史實を検討し得たときは、何だか眞砂の中に、黄金でも見附けたやうな感を起さしたものであります。

朝敵の名は負ふたが足利尊氏が宇佐へ祈願した事實もあるさうな。



宇佐神宮史で、特筆しておかねばならぬことは、黒田、細川兩侯の神宮造營の記事であります。

黒田長政父子は、軍國の事に奔走し、寧日なき中に、流石は宇佐八幡宮に對し、誠に崇敬の眞心を現はしてゐます。天正十七年に向野郷といへば、宇佐神宮負郭の地でありませう、三百石を献じ、文祿二年には、二の御殿以下、十字の改築造營を行ひ、彼の大友氏の焼打以來、荒廢してゐた神宮の面目を一新さしたとの事です。

細川忠興公が宇佐郡を領することになりますと、先づ慶長五年、就封と同時に、同じく向野郷五百石を献じ、同十一年には一の御殿を、同十五年には三の御殿を造營し、同二十年には遂に千石にして献納したといひます。

同時に黒田氏の手にかゝらぬ攝社末社から、附屬の建物を五十餘宇といふもの、悉く改築



し、上は大宮司に三十三石、社僧の眞乗坊に十二石いくら、以下百五十人に、それ／＼家祿を興へられ、流浪の社人共も一々取立てられたので、頓に社頭が賑つて來ました。



それからして細川侯のため、二大慶典が復興されました。

元和元年であつた。先づ行幸會ぎやうこうゑが再興されました。既に數百年も全く廢たれてゐた、八攝社御巡幸といふ、古い行事が執行された。八攝社巡幸の順序は、一番が田笛社、それから鷹居、瀬社、泉社、乙咩、大根川、妻垣、最後が小山田社で、三日を費して御還幸になる。翌元和二年にも續いて行はれたが、爾後又今日まで廢絶してゐます。

元和元年再興の時は、小山田某が七日間斷食して、御神體を作つたとか、神幸中數度不思議なことがあつて、青空から奇妙な花が降つたといふので、其狀況を一々江戸にある細川侯に、代官長岡式部が報告をし、洗米を添へて送つてゐる。すると三齊公悦び限りなく、そんなことは上代にあつたためしと、御感になつたとあります。

それから放生會再興である。これは今日も續いて行はれてゐます。何にしても、お八幡様は、山の奥にじつと拜まれてゐることはお嫌いなので、笛太鼓、樂隊入りで、御出かけになる。御遊化時代は支那天竺まで、御飛翔ひしょうされたといひますが、今日もあゝした三千年の茂みのうち、宮居靜かに御鎮まりましてはゐるが、遠く滿州の野にも、御活動されてゐるのであります。

## (七) 八幡式

磴道いしだんをのぼりつめ、桃山式建築の西大門を這入ると、盲目めくらでない限り、あのキン／＼ギラ／＼と光り耀いてゐる、一の御殿の屋根が目を射る筈であります。あの反りそを持つた、切妻造りの屋根こそ、八幡造りと稱する獨特な建築であります。二棟並んでゐるから、中間

に雨をとる樋を通さねばならぬ。其樋が又仰山なもので、太くもあるが黄金の戸樋といつてゐます。

最初は固より一字であつたらうが、祭祀や拜禮の爲め、前面に一字を建てたのを、更に便宜上接近させ、斯うした奇形な建築法を産み出したものでせう。石清水でも、大分の杵原でも、何れも之を踏襲してゐます。

それから八幡式鳥居、唯二本の柱を立て、それを安定させるため、二本の横木を載せるまでの事だが、其祖型や淵源につき、研究すれば可なり秘密があるやうです。

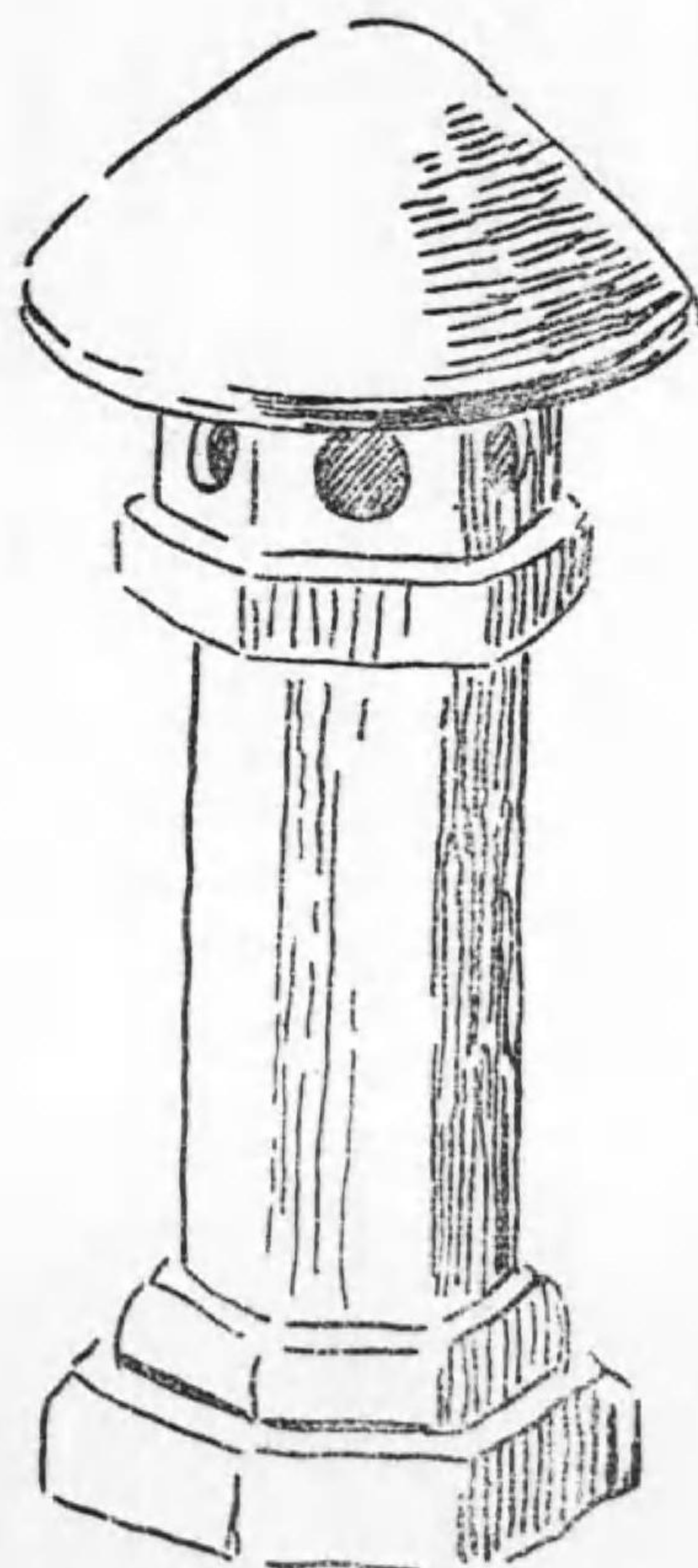
時に八幡造神殿でも、鳥居でも少し技巧に出来てゐて、原始的でない感があります。其要は一番上に横わたす笠木も、其下の貫の用をなす鳥木も、其兩端を禿墨と稱して、斜に切り落してあり、兩柱は稍内方に傾いて安定性を見せてゐる。これを九段坂の靖國神社の鳥居や、宮島のに比べると八幡式がうなづけます。



神輿のことですが、日向征伐にお越しになつた時の神輿、それから奈良大佛鑄造につき、御出かけになつた時の神輿は、どんなものでしたらうか。今日から一向想像がつかぬが、今日毎年夏に行はれる、御神幸に用ゐられる神輿についても、宇佐式といふてよい、特長があるのです。元來神輿といふものは、鳳輦に模したのか、或は高御座に似せて造つたものでせうが、神佛習合思想の影響で、神殿が佛化したように、神輿にも佛様の飾り見たやうのものがあるのです。

今日の神輿は、四百年前大内義弘が寄進したのだとは、前述の通りであります。その神輿の内壁に、佛畫を描いてある障子（今日では襖といひます）が、四方にたて、あつた。どうでせう、御神體を納める神輿の中に、然も法華經の文句から取り出した、佛様の繪を描いてあるとは、想像もつかぬことではありませんか、然しそれを八幡式といふ個條に數へるではありません。四方に金襴の帳を垂れ、胴の部が細くない、別にあまり扮飾を用ゐぬ所に特長があるのです。

宇佐参詣をして、あの石疊を上る、兩側にすらりと並んでゐる石燈籠を、頭寒足熱で通過されては困る。あの苔むした石燈籠も、宇佐を表はしてゐます、全部祈願奉賽の誠を表したもので、慶長をきつて古いものもない、元和元祿と時代は若い、あの中に春日型などの様に、華美な技巧なのは一としてない頗る質素なもので、寶珠などは殆どおちてない、



宇佐式石燈籠  
【尺五約丈】

笠、火袋、竿臺とあの單純な、無恰好な處に、八幡型といふ宇佐文化のかほり高きものがあるのです。百六十いくつあつたといふが、今日では百計りに減つてゐます。

### (六) 寶物館の一瞥

世に神社佛閣の寶物館見學ぐらひ、つまらぬものはないと、誰もが鼻をつまんで逃げるものですが、宇佐の寶物館はそんな月並のもの計りでない、然し何といつても尙古趣味のないお方は是非がありません。

あの國寶、天復の年號をうつてある、古鐘の如きは、日本に二つしかない、福井縣の常宮神社に其兄弟分の一つがある。それには七十年ばかり若い大和六年の銘があるさうです。天復四年といへば、彼の菅原道眞が大宰府でなくなつた年で、もう千年以上になるし、朝

鮮は新羅時代に出来たのです。桐花文や佛像の浮彫も、随分珍しく古雅掬すべきものです。あの七十幾つと並んでゐる、能樂面、能衣裳などは、細川忠興侯の寄進といへば、三百年にしかならぬが、能樂面の中には優に足利時代の作で、國寶的の優秀なものがあるといつてゐます。少し目をとめて見てほしい。

流石お八幡様は戰神程あつて、刀劍を多く藏してゐられる。忘れもせぬ、昭和五年二月二十四日の夜、寶物館を破つて、寶刀の中でも尤物を選びぬいて、十六口を盗み出した稀代の怪賊があつた。然し神罰踵を廻らさず、賊は見つかり一本も失はず、直ちに取り還へしたが、中には天國（價三千圓）祐平（二千五百圓）祐定（同上）貞宗（同）助光（二千圓）其外盛高、宗吉など總額三万圓元あつたとは、えらいではないか。

盗られた中ではないが、豊後行平など、來ては、御烏羽天皇の御番鍛治であつたし、大分郡高田村の人といふので、郷人に最も親しまれた刀祖である、其墓も過去帳もちやんと高田にある。刀劍界の棟梁株であつた。

行平の段でない、日本最古の刀祖が宇佐にあつた、それは應神天皇の皇子ではないかとまでいはれた、神息といふ社僧で、其術は神に通じてゐたと、賞讃の的となつてゐました。刀の姿勢などから一つの型をなしてゐる、重は厚く、鑄の狭い所が特徴であるさうな。日足に神息屋敷といふが、今に其名をとどめ、小椋山の人屋谷に鍛冶場があるといふ所から、どうしても奈良時代の刀祖でなくてはならぬが、帝室博物館に納まつてゐる神息刀の考證では、平安時代としてある。何にしても天下最初の刀劍家の鼻祖が、宇佐にあつたといふことは、肩巾が広い感がするではありませんか、續いて信國了戒といつた刀劍家も、久しく宇佐を故郷にしてゐたといふので、此所にも宇佐文化の一沫が認められてゐます。

譽田天皇

右大臣源朝臣多

菱形の小倉の山ははるけきを君を守りてかけもはなれず

## (元) 宇佐の名物

宇佐には毎年三度五度でない、富籤興行といふがあつた。今日の馬券は富籤復興同様で、宇佐繁榮策であります。當年宇佐の繁榮は半分以上、富籤がもつてゐたのです。今日の様に宣傳法がないから、仲買が日本全國を賣り歩いたものです。それで一攫千金を夢みる連中が、すつと上方からも雲集したものです。

今は昔、天保の頃の、日本全國の遊廓番附で見ると、九州では長崎博多が勿論三役ですが、之に次くのは宇佐でした。中津あたりの遊女屋をばすつと下に蹴落してゐた、それが今の鐵の鳥居から北に折れた、裏町寄藻川にそひ、すらりと建ち並び、青い暖簾、赤い提灯をつけて、遊子の袖をひき、絃歌に酔はし流連荒亡、家を忘れさしたものです。尾張名古屋で名高い、菱屋平七といふ旅行家の、享和二年の紀行文の中に。

吳橋の下、川にそひ、新しくたつた遊女屋もある、茶屋もある、劇場もある、宮に歸えつて聞くと、社家三百人、外に社僧も澤山ある。毎月六齋日に富をつく、大富は六千四百文、中が千五百貫、小で千貫文、云々

といつた文句がある。富籤で自然青樓も賑つたものでありませう。



名勝によい所なく、名物に甘味ものはないときまつてゐます。宇佐の名物宇佐飴も、其類ですが、然しあれで一年に糯米の貳百俵以上も飴に延ばす家がある。宇佐町で一年に約八百俵を練るといへば、豪勢なものではありませんか。

飴の由來、口碑の傳ふる所では、宇佐津彦が、一柱臈宮を建て、神武天皇をねぎらつたのが、此飴であつたとか、又神功皇后が三韓から携へて歸へり、應神天皇の御養育の料にしたとか、來歴も古いが、宇佐神宮に最も相應はしい名物であります。同じ宇佐の名を冠する「宇佐藥」といふもあるが、時代の動きで此頃はほんの名ばかりとなつてゐます。

練つて引き延ばすその餘よりも、宇佐といふ神の里に最も相應はしい原始的藝術がある。宇佐のあの寂れた町を行く、春夏秋冬時を選ばず、全く人間離れした、謡曲の聲が洩れるのです。餘同様に古い歴史がついてゐます、まだ、謡曲の生れぬ前の猿樂といつたときから、今日の能樂堂は出来てゐたのです。爾來神能と稱し、盛衰はあつたらうが、九州では最故參の能樂堂で其沿革も語れば床しいものがあります。イヤ、ハー、ボン、

宇佐千石、人間としての名物がないのは、聊かも足りぬ感はあるが、然し宇佐兩男爵家は、出雲の千家氏と並んで系圖正しい家といはれてゐる。宇佐氏は宇佐津彦の子孫で、十三代の武雄といつた人が、宇佐公の姓を賜はり、十七代池守といふ人が、嵯峨天皇の朝に大宮司に任ぜられてから、四十幾代と宮司を續けたといふから、宇佐の名物の一つに數ふべきでせう。到津宮成と分家したのが、元徳といへば、五百年にもなります。

元來神宮奉仕の家、左程活動されるものでもないが、始祖宇佐津彦、四十三代公通卿の如きは、史上赫耀たる人物である。六十七代公著などの人材もゐた。公著の適孫公古卿の

如きは、歌道入木の道に堪能な人であつた。



神苑に足をいれる人で、あの不恰好な南翁の銅像をとがめぬものはない。中にはそんな水路成功者の銅像を、神苑におくは怪しからぬと、叫ぶ人さへある。

然し歴史を糺せば、宇佐川の上流、廣瀬堰と申すは、寶曆の昔、神宮の代官麻生善右衛門といふが、八幡様の神話を蒙り、社廳の事業として、起工したのを、文化の頃富田久兵衛、天保中日田郡代鹽谷代四郎といつた人が繼續し、皆失敗して終つた難工事を、

此南市郎兵衛翁が奮起し、先づ八幡様に成功を祈り、十二年の苦心によつてやつと成功したので、檀畑であつた宇佐の丘が、一面美田と化したといふわけ、猶ほ翁は之が爲め、あらゆる家産を蕩盡したが、開發者の優先権ともいふべき、新田を一步も私せず、然も神田一町を神宮に納めたといふ、清廉な人であつた。

翁は廣瀬水路の成功だけでない。内務省の官吏となり、猪苗代湖の疏水工事に成功し、

天龍川の排水、富士沼の排水などに、功績があるので、松方公から、武士的事業家の典型とさへ、稱讃されてゐる。大正八年八十五歳で歿した。銅像を神域に措く暫らく之を諒とせられたいものです。



宇佐郡は、省線鐵路、東西に貫き、それに宇佐參宮線、豊州線の私線之に交叉してゐるので、縣下私鐵王國と呼ばれてゐる。

時に名勝地の經濟といふものは、何處でも同様で、名勝が稼いでくれるのです。宇佐では、お八幡様が稼いで下さるといふわけなのです。館の賣れるのも、御養錢があがるのと同じ、又參宮鐵道の經營の如きもまたそれであるかもしれません。

一方豊州線の方は人間だけで、遣るので段々手を焼いた話もありますが、參宮線の方は大正三年に生れ、まだ若い、經營其人を得、近來十五万の資を五十五万圓に増資し、私鐵としては天下罕に覩る堅實な發達ぶりを示してゐる。將來線路も延長されるらしい。

參宮線延長、神苑擴張、神域淨化等やがて實現し、宇佐てふ神都の面目も一新し、神宮中心によつて、祖國精神の涵養といふ國策に寄與することでありませう。

## (二) 御許騒動

時に宇佐の奥院である御許山に絡らんだ、御許騒動ぐらい、郷人に親しまれた物語はあるまい。其騒動が志士一夕の燕話えんわで出来たものでない。それが慶應元年の暮から、同四年の春にかけ三年越し、語れば随分、長文句です。

慶應元年雪の師走、耶馬溪は木の子岳の麓、志士の巨魁、高橋伊賀守の山莊に於て旗を擧げ、日田郡代權柄けんべいの自負右衛門じゆもんを討取り、勤王の先途を承うけたまはらうと、陰謀を廻らしてゐた所を、事半なかばにして露顯し、代官の養つた農兵ばらに追つたてられ、志士の一人、柳田清すげ

雄といふ柳浦村出身、當年十八歳の盲人は、一人取り残されて遂に捕へられ、日田の獄に投ぜられた。柳田に乗せた張り駕籠は、天下の名勝耶馬溪に入る。

高くなり低きく聞えて谷の音の、變るは變る景色なる哉

と駕籠の中から詠み上げた。有爲轉變の世の中、變れば變る景色とは、孝子柳田清雄の心事、誠に哀れでありました。

木の子岳敗殘の志士は、秋風にひるがへる木の葉、高橋伊賀、佐田内記、下村次郎太の面々宵闇に紛れ、溪を涉り峰を超え、大岳山の嶮を跋涉す。師走十七日の月を山端に迎えた。佐田内記兵衛降りかゝる雪を拂ひ、

末の世もまた末の世もゑみしらを拂はでやまんことならなくに  
と呪をこめし白雪は、一行の袖を濡らした。

月影を踏み、山又山、麻生谷に下りついたとき、東天は將に白まんとした。然し頼む蔭もなく、しぶく歩を進め、高並で辛くも一夜を明し、二十日やつと目ざして來た安心院

に着いた。

安心院は縣屋、重松七郎、實は高橋伊賀と從兄弟、志士は次ぎく、重松邸に落ち集つた。主人重松の肝煎りで、歌會はほんの表面、前段の續き文句、日田襲撃の謀を廻してゐた。年は明けて慶應二年、長三洲も青木武彦も往來してゐたが、志士の出入はすべて夜、茶を出すも、飯を運ぶも一切下婢だに近づけなかつたが、然るにいつか捕吏に嗅ぎつけられ、窪田代官の直參、足林三平、農兵數十人を驅り、安心院谿へ乗りこみ、草を分けての嚴探、重松掩護の効もなく、又しても蜘蛛の子で逃散、然し今度は一人の犠牲も出さなかつた。

一方宇佐には、かねて青木武彦、時枝重明を中心に楠公會といふが出来、志士を糾合してゐた。毎日廿五日大楠公の湊川戰死の日を記念とし、尊攘を標榜する結社が出来てゐた、

湊川水は絶ゆとも盡ききぬとも心に汲まぬ人はあらしな 秀

安心院を掃蕩された、二豊生粹の健兒等、第三回の陰謀策源地を宇佐とし、三々五々宇



佐に落ち集り、楠公會に合流し、武神八幡の内垣に潜み、神の佑けにより、本望を遂げようとした。

宵から吹き荒さんだ木枯は、神苑の茂みに納まつて、夜は深々と更けて來た。主人時枝重明の斡旋で歌の會の名に匿くれ、一種の寒燈を圍み、十數名の志士謀議を凝らしてゐた。長三洲主座を占め、評議を進めてゐる。降る雪は雨戸に音信る、佐田起つて雨戸を細目に開け、

ヤア大變な大雪だ。

千早ふる神のしるしの現はれて清めの雪のふりにける哉

と古歌を口ずさんだ。雪より清き志士の精神、

時に時枝氏の家人、母屋の方から慌しく駈けこみ、主人重明氏を招き、

家人「もしく、一寸」と招く

重明「イヤ今頃何事かい」と廊下でヒソク

引き還へして來て、重明氏聲をひそめ

重明「今家内の告ぐる所では、十數名の捕吏が取圍み、中の一人が家内に對い、長光太郎が來てゐる筈だが、と糺くので、家内は、實は今晚は歌の月並會で附近の歌人は三四見えてゐますが、そんな人は決して加はつてゐませんと答へたので、是非なくあたりを見廻し、出ていつたといふ。本亭は、一方は川に臨み、三方は高壁を廻らせば容易には這入れぬが、然し捕吏の手にかゝつては、多年の苦心も水泡に歸するわけ、雪に紛れ姿を隠すが得策ではあるまいか。」

といふと、聞きもあへず、原田七郎脱刀を執り。

「何々農兵ばらを斬りまくり、血祭となすも、一快事ではないか」

といへば、血潮の高鳴る青年總立ちとなり、いきまくを、長光、佐田内記起つて之を制し大事の前の小事、彼奴らが頭首を絶つて何の役に立つ、諸君先づ座につき給へ。代官の物色は長光一人である、余、暫く跡を晦まし、馬關に渡り時を待たう。

といふので、志士の評議も亦しても實行に觸れず、逃散の止むなきに至つた。長光は下村に送られ、長洲港から輕舸けいかを飛ばし長州に渡つた。

長光は落し、捕史の銳鋒をば避けたが、中々解散せぬ。青木を中心に前議を進め、慶應二年十日、驛館川原に兵を擧げ、日田奇襲の計劃を立て、四方に檄げきを飛ばした。

時に吉成敏夫が使者として馬關に急行し、驛館川擧兵の事を長光、佐田に告げた。

其留守の出來事に、神宮の床下に隠しておいた、兵器は奪取され、時枝重明兄弟が逮捕されるといふ、悲惨事が巻き起つた。

驛館川原擧兵も、中々直線的に進行せぬ。明日といふ日になつて、菅野三郎といふもの農兵二三人をつれ時枝邸に乗込み

菅野「主人は御宅ですか、あなたが時枝氏、少々御尋ね申したい事がある、四日市役所までお出を願ひます。」

と紋切的口上、時枝は「サー來たな」と思つたが

時枝「四日市役所へ出頭、拙者は大宮司配下の神官、勝手に外出はなりません。」

と弾ねつけた。然し窮餘の策で相手を躊躇させ、其間にと考へたが

菅野「では大宮司へは交渉させませう。身仕度して貰ひます。」

と別使を到津家に遣はした。時枝氏は今は遁るゝ言葉なし、護送されて四日市に出頭。夕陽を踏んで、一筋町を西に向ひ歩を進めた。町内では「時枝氏が代官に曳かれた」サー大變と、右往左往に逃げ散つた。時枝氏は其儘日田へ送られ揚屋入り。

明けて三年五月廿四日、宇佐神宮修覆の事からして、隠蔽いんぺいの兵器は見附け出され、高田役人出張、悉く没收された。木銃數十挺、刀槍、天幕、高張提灯と數百点、志士が多年の苦心で集めてあつたものを、全部奪取されて仕舞つた。

其翌二十六日、奥並繼、亦高田役所に引渡され、又日田へ押送された。計畫の一段全く曝露され、時枝、奥、巽きの柳田、太田、皆鐵窓の人ときまつた。

そこで、宇佐では大恐懼、最早膝を容るゝ餘地がないと、いふので、小山田、石坂、永

弘、吉成の同志暫く御許山に身を潜め、遂に激浪に身を托し、長州に脱走した。此所にも凄惨を極めた悲劇が演じられた。



二度三度と駆り立てられた志士は、對岸の下關に屯集し、長州の援けを得、更に謀議を續けることになった。然し下關での謀議は着々進捗し、首帥に花山院を推戴せうといふ交渉も、下村次郎太の上京、小島長年の斡旋で事は決し、天草代官を襲撃して、軍糧調達の事も手筈は出来た。

佐田内記兵衛の采配で、長州報國隊脱走の兵を操縦して、田の浦を出帆した。十三日の月は影淡く海上を照してゐる。西風浪を揚げ、船は矢を射る如く、長洲の浦に着いた。志士が積年の恨みを晴らす日が實現した。松吹く風の音は、志士の爲めには成功の音信であつたらうか、一行六十人、靜かに上陸、二手に分れ、隊伍堂々、四日市へ向つて進軍する。希望の星は玉の如く耀き、大地は眞白く鬱結の霜を敷いてゐる。向ふ所何ものも碎かん勢

である。

總	裁	桑原範藏	參	謀	清原靜馬
參	謀	天野四郎	郡奉行	佐田内記兵衛	
一番手隊長	平野四郎	二番手隊長	長	四郎	
三番手隊長	高木右門	小荷駄奉行	管野五郎		

追手の一隊は佐田内記の先鋒、正門から發砲。固より應戦するものはなかつた。周章で出て來た一人(石野道衛の家來)其場にバツサリ遣られた。

筒先揃へてドンドコ討つたら、久留米の役人ド玉を抜き、禰子かくまも着物きるまも、よろ／＼這ひ出し、堀を越すやら裏門出るやら、さうこうするうち陣屋が焼けたつ、陣鐘ガーン／＼鐵砲ドンドン(當年のアホダラ經)

久留米警備隊の主領、榊氏の指揮で、東別院に柵籠ると聞き、狂へる志士、直ちに之に向ふ。さしも壯大なる大伽藍も瞬くうちに灰燼となる。火の柱が東雲の空に林の如く立つ

て見ゆる。其凄惨たる光景、白刃相搏ち、老幼は號哭の聲をあぐ、修羅の巷と化した。警備隊固より志士の敵でない。何時しか逃亡、志士は豫定の行動を取り、威風堂々、抜刀、隊をなし、白霜を踏み途列の人に送られ、揚々と本陣馬城峰に引きあげた。

山上には花山院卿の紋所、笹龍膽ささりんどうの紋をうつた幔幕を張り、三條公より給はつた錦の旗を樹て、絡驛市らくやくしをなし、非常な光景である。志士が積年の素懐を達した、今日といふ今日が實現した。



時に逃亡した農兵「吾々郷黨の健兒として誣はれてゐるに、陣屋は焼かれ、一矢を酬はずしては農兵の面目がたぬ」と、木の内村で勢揃へをして、堂々進撃して來た。

「今日は農兵と、御許勢おもとせと一と合戦ある」

と、見物人山をなす。處が山上の旌旗の風に翻るを見て、農兵共が怖氣おそけがさして來たと見え、だんく足が重くなり、驛館川原で一隊の行進は全くとまつてしまつた。すると、

「此處まで來て一矢を放たずして退軍したといつては世間の物笑ひ、此處で山上に向

ひ一齊射撃いっせいしゃびつをやつて退却しては如何」

といふ名案が出た。すると隊長の命令で、川端にズラリと散兵を敷き、二里も三里も隔てゝゐる山上に向け一齊に火蓋をきつた。これで出陣の主意もたつたといふわけ、退却となれば、瞬く内に隻影もとめぬまで敏捷に退軍した。最早三年に亘る連続映畫、常に悲劇的に脚色されてゐたが、此所に始めて觀客をドットどつと揺めかした滑稽劇が登場された。

山上からは志士の一隊、日の丸の旗を押し立て、樂隊が先頭に山を操り出して來た。

今日はお藏おくらの焼討がある。川筋の農兵と一合戦がある。一つ實戦を見物せう。と人浪たてゝ中須賀に群集する。

米を積んだ荷駄馬が、川部の土手に連いた。連いて山上に積み上せる、提灯松明たふまつが山に連いた、本當に映畫で見る活劇であつた。



志士の飛檄が中津藩に傳はつた。七族五老三千の士族を有する中津藩も、僅か六十名の瘦浪士に心膽を奪はれ、まさか錦旗に向つて矢は放てないし、衆議の結果、領民安堵を目的に、一隊を宇佐郡笠松町に出動させることになつた。恰も人間が鬼の番をする恰好。

其所に花山院を迎えるとして、志士の一隊が遣つて來た。それはく威張ちらして、

「オイ、案山子武士何事をなす。」

と罵言を浴びせて遣り過す。すると中津藩士三輪彦八、目をむいて起ち、「ナニ無禮」と腕を扼したが、管沼等抱きとめ、事はなかつたとか、

さて志士が迎へんとした花山院様は、長州藩に抑へられ、遠い都へ追ひ還へされ、扈從して來た小島長年は獄に投ぜられ、獄中で食を絶ち憤死して終つた。

既に大事は去つた。あたら手中の玉は抜き取られた、草賊視されるも是非なきに至つた。花山院様宇の島上陸と聞き、志士は宇島に出て、待てどかはけど影だに見えぬ。

沖の彼方に、浪をまき、霧らに進んで來る船がある。怪しいと一同は眼をはる。豈圖ら

んや、これが長州討手の兵を乗せてゐる船であつた。花山院を待つ、一日三秋の思ひ、

「今花山院様が着いた、到津様へ御宿の準備、早速出迎へ」

との飛報も、實は吾々を敵と狙ふ、討手の一隊の到着を知らした凶報であつたとは、誰も豫期せぬことであつた。山上の動搖は固よりである。

山口格之助、野村素助、長州脱兵を取り還へすといふので二百人を引率し、宇島に上陸し、中津城下を蹂躪して、四日市に練り込んだ。山上よりは素知らぬ態で、先づ下村次郎太をして、之を迎へさせ、諒解を得ようとした。

長州勢中々高壓、妥協の段でない。首將に會見したいと、いきまいて宇佐に乗りこんだ。宇佐會所で佐田内記兵衛、平野四郎が長州討手の將、福原幾彌一行を向ふに廻し、和戦の劇談判、これが最後の土壇場であつた。

福原は盛んに乱賊呼ばりをなし、脱兵の引渡しを迫る。佐田は之を辯疎する。

「我々の主張は正義である、勤王である。脱兵は收容するも、貴藩に累は及ぼさぬ。そ

れよりは花山院を抑留したわけが聞きたい。我々を窮地に陥れるとは怪しからぬ。」と逆襲に出た。

平野が膝を進めて、

「脱走兵には毛利家恩顧の臣は一人も居らぬ。彼等は天下の志士である、國士の禮を以て遣せられよ。貴藩之を追捕せんは、無名の事に屬す、猶脱走の責は余一人之を負ふ、願くば余が首級を藩公に捧げ、志士が脱走の罪を赦せ。」

といふより早く、太刀を把り、居直つて割腹する。

電光一闪、迸血淋漓、一坐血の海と化した。何等の壯烈、何らの悲絶、嗚呼平野眞固の古武士、然も彼が暴を翻すことを得ぬ。佐田起つて、

「此上は本營に歸えり、彼等に歸藩を勤告せん」

と辞して、玄關に立つと、幕後にひかへた長兵躍り出で、聲もかけず、唯一刀の下に斬り倒した。佐田不意を討たれ、起たんとするを、二刀三刀、遂に横死を遂げた。あはれ二十

九歳を一期に、毒刃に斃れた。幕後に兵を置かぬは智者の一失であつた。

長兵の脱走兵引渡しは、好辞甘言であつた。首帥を圍撃にし、其まゝ山上に攻め上つた。矢部口より進撃する搦手の一隊と相合し、硯石で火蓋をきつた。山上の志士は之を迎へ、高きによつて應戦、直ちに數人を斃したが、總裁桑原の戦死と共に、乱軍となり、遂に敗退、長兵山坊に火を放つ、火焰天を焦す。志士多年の苦節も、全く徒爾に終つた。枯木西風に鳴り、落葉狼籍、時に正月廿三日、御許山に楯籠つて、十五日間、翌二十四日には佐田内記兵衛、平野四郎、及び山上で負傷して捕へられた、柴田直次郎の首級は、四日市に梟せられた。

梟首台に二日ばかり曝らされた三個の首級は、非人の手に亘り、千源寺原に埋められた。時に内記兵衛が最愛の妻雪子は、男まさりの女丈夫、雄々しい扮装で二三人の若ものを従へ、夜陰四里の路を踏み、千源寺原に埋められた、良人の首を取返すべく出かけた。非人小屋は夜更けて、明るい灯のみ、懸命の鍬をふり、三つが三つの首を掘り上げ首桶に納め

た、サア章駄天走り、どうか一人にも逢はずに歸り着きたい。時々飛雪に顔を負け、息引ききつて歸り着いたのは、夜も明け方であつた。今も三個の墓が相並んで、ありし昔を物語つてゐる。

一陽來復、明治も三年正月、敗殘の志士相寄つて、三週忌の追悼會を営み、落城の日を紀念し、松方日田縣知事に請ひ、志士の碑として、十七本の石柱を日足の里に樹てた。然るに何者か死者に答うち、石柱を悉く打ち折つて終つた。其破片の九つを拾ひ、今は宇佐神苑。祖靈社のかたへに並べてある。

今年また散り遅れんと思ひきや馬城の高根の山櫻花

の遺詠を刻んであるのが、佐田内記の墓であります。固より断片の墓石、黙々として語らねど、無聲の響きに遊子の胸を打つものがある。春風秋雨已に六十年、歌書よりも史書に悲しとは吉野山ばかりではありません。清らかな神域にも斯うした腥い史話も絡つてゐます。

### (三) 和氣清磨卿と宇佐

和氣清磨卿が、お八幡様の御神勅を請けるために遙々宇佐に參られたのは、稱徳天皇の神護景雲三年七月二十七日でした。して見るとやがて壹千貳百年になります。

お八幡様が、ちやうど今の大尾山に鎮まりましたてゐた時でした。

時に大尾山には、秋風高く音信れ、鳴く禽も幽に聞え、寄藻川の水は涼々と、底深く流れてゐました。

清磨卿には、身を潔め、神前に海の幸山の幸を供へ、御勅命の旨を述べ、丹誠を凝らし。一心不乱に祈請してゐます。水の音、松吹く風、さては梢に傳はる秋の調べ。成神韻ならざるなしであります。卿には唯々神威をかしこみ、一七日断食して、真心こめて祈念してゐました。

其満願の日の明け方でした。凄い風がさつと吹いて來たと思ふと、大空が俄に曇つてま  
 りました。すると、金の御幣がチラ／＼黒雲の間をひらめくのです。神殿の奥からは何  
 だか鳴動の響が聞えると思ふと、神殿の扉がおのづと開きました。赫々たる靈光四方を照  
 し、大神あり／＼とお姿を顯はされた。其長三丈計りの陽氣が焰々として東天高く、たち  
 上りました。其光は恰も満月のやうでした。

卿には唯恍惚として仰ぎ見ることも出來ず、瞑目祈請を續けてゐました。すると何所か  
 らともなく、十二三才計りの巫女が忽然として顯はれ、神前間近く進みよるかと思ふと、  
 つと立ちどまり、御聲さわやかに、あり／＼と神勅を宣り給ひました。

我國は開闢以來君臣の分定まれり。臣を以て君となすこと未だこれあらず、天津日嗣  
 は、必ず皇緒を立て、無道の人をば早く掃除すべし。

と高らかに神託を傳へられました。其巫女は、はたと倒れたと思ふと、影も形も見せず消  
 え失せてしまつた。

卿には其奇瑞に接し、卒然吾にかへり、はら／＼と涙を流し、再拜九拜謹んでお答へ申  
 上げた。

今、明白に御神勅を承りました。早速都に回り、此趣きを奏聞申し上げます。

と精心こめて申上げると、神殿の扉もおのづと閉ぢたのであります。時に殿前の燈光は影  
 淡く、寄藻川の狭霧も漸く消え、山端の旭も笑顔を現はしてゐた。卿には眞の神勅を承り、  
 其喜びは譬ふるに物なく、急ぎ旅装をと、のへ、宇佐を發足し、晝夜兼行で歸京の途に就  
 かれた。

卿が都に歸へり、復奏する其一言は、それこそ九鼎大呂より重いのです。正を以てすれ  
 ば、宗廟を安きに置き、容慮を安んじ奉るが、其身は遠島に流竄される。曲を以て道鏡に  
 媚ぶれば、大政大臣の榮官を極める。然し志士仁人は身を殺して仁をなし、生を捨て、義  
 を取る。卿には斯うした大任を負ひ、勇んで宇佐の里をあとにしたが、海上も陸路も神に  
 護もられ、無事安穩に二十日餘りの日を費し、八月十八日に奈良の都に着きました。



卿が歸洛と聞き傳へ、都の空では朝野を動搖めかしたのですが、「早速参内して神勅を執奏申せ」とは最も待ちかはいてゐる道鏡の命であつた。卿には長途の疲れもいとはず、翌十九日、早朝参内して神勅を奏上する段取りとなりました。聖上には張臺の内に御臨御あらせられた。道鏡は今日を晴れと、身に錦繡をまとひ、意氣昂然と張臺の右側に座を占めた。時に吉備右大臣を始め、公卿百官は左右に列座して威儀を正した、綾羅星のやうである。宮中は唯嚴肅な氣に充されてゐる。卿が勅使としての使命は今日果される。卿の口より出づる神勅や如何、卿には列座の視線を一身にあつめ、鞠躬如として膝行し、御前間近く歩を進め、恭しくかしまつたのです。卿の沈着た態度を見た道鏡、おそろしい眼を見開き、一度は怪しんだが、或は我意に従ふものかも知れぬと見直した。そして大體に於て樂觀してゐた。其時の道鏡の態度こそ見ものであつた。恐ろしい眼配りで、卿が殊勝な態度を一瞥したり、わざと素知らぬ風をして見たり、手の措き所なき有様であつた。それも其はづ、多年の野望の成るか成らぬかと、目睫に迫つてゐるのである。

決死の前には何者も恐るゝものはない、唯「八幡大菩薩照覽あれ」と、心に念じてゐた。「早く神勅を申せ」と道鏡に促され、動悸を静め、従容威儀を正し、神勅のありのまゝを奏上した。其聲は誠に朗々として、天地を震撼させたのです。

臣清麿、勅命を奉じ、八幡大神の神託を拜承致しました。其御神託と申すはこれであります。

「我國開闢以來、君臣の分定まれり。臣を以て君となすこと未だこれあらず。天津日嗣は必ず皇緒をたて、無道の人をば早く掃除すべし」

と聞いて、列座の諸卿は顔を見合せ色を失つてゐる。殿中は水を打つたやうである。「無道のもの」とやられては、傲岸な道鏡でも、熱湯を注がれた感がしたであらう。見る間に彼の顔色は青くなつた。又赤くなつた。主上には何の勅語もあらせず御入御になつた。

道鏡多年の希望は、今一步といふ瀬戸際で破れて仕舞つた。大政大臣禪師が早變して、破戒僧となつた。然し久しい間暗い影がさしてゐた九重の御殿も、頓んに清明なつたので

す。やをら起つた道鏡、列座の百官を睥睨し、

やよ、清麿、御神託を矯め偽言をなす。無道のものをは掃除すべしとは何事か、見よ、今に汝が首を刎ね、九族を殲くして呉れる。

と、怒つた／＼、怒り狂ふた。大政大臣禪師、満面に朱を注ぎ、眼血走り、あさましく罵り狂ひ、たう／＼殿上を踏み鳴らし、あたりを蹴立て、退出した。

卿には豫期した、彼が怒罵、悪罵、空吹く風だ。次ぎを待つて悠々まかりたつた。

意地悪るの道鏡、入内して天皇に迫り、清麿をあらゆる重い刑に處し、私憤を晴らさうとしたが、天皇には、畏くも卿が誠忠を嘉し給ひ、之をお許しにならなかつたが、遂に遠流に處することになつた。

丹青によき奈良の都も秋更けて、尾越に通ふ鹿の音に哀れを催されたのであります。衆木凋落、嚴頭の一木獨り翠の色をなし夕陽に耀いてゐる。一命を國家に捧げた清麿卿、どんな刑戮も敢えてこわくはなかつたのであります。歸へり姉の法均尼と語り合ひ、皇室の

御安泰を祝し、憂愁にかきくれてゐる妻子を慰めてゐる處に、其日も暮れ方になつて（三年八月十九日）本官を解かれ、因幡の國の員外の介といふに遷されたのです。時に卿には年三十七で三人の子供がありました。

妖僧道鏡も中々腹がいへぬ。更に清麿を穢鷹に改め、姉の廣虫（法均尼）を狹虫と改めました。滑稽至極、あらゆる手段を以て苦しめ、侮辱せうといふので彼が心事、益々哀れに思はれるではありませんか、山陽先生はいつてゐる。

和氣の清、清を改めて穢となす。然し清は損ぜぬ、清氣は浩々天地に塞がる。護り得たり、赤日天中に明かなり、臣の舌は抜くべし、臣の語は屈すべからず。三寸の舌、萬古の月。

と謳つてゐます。

意地悪るの彼、まだ腹の虫を抑へきれぬ。卿が、よぼろといつて膝頭の筋を斷ち躰へにしてみました。名を傷づけ、體を傷づけ、愈々大隅の國といふ、海の果てに流しものにし

て終つた。姉の狄虫は、女といふに同情してか、近く備前の國に流した。卿には、豫て身命はなきものとまで覺悟してゐたものですから、更に惡びれた顔も見せぬ。秋風一滴の露、其清らかなること玉の如しである。固より尋常に罪に服したのです。

天涯千里、一たび去つて復た還るべき時も期せられませんが、名さへ穢塵、身は足なへ、いたいけな姿、生き別れ死に別れ、哀別の涙に幾夜か明しました。最愛の妻子に盡きぬ別れ、然し時は刻々に移つて行く、警固のものゝなすまゝに、あやしげな輿に乗せられ孤影棲なれた都を後にしたのです。

天地に愧ぢぬ誠忠無二の大忠臣も哀れ、妖僧三寸の舌にかゝり、さすらひの身となつて、都をおくり出されたのである。卿を思ひの丈夫が、深き誠を筑紫濁さして落ちゆく卿を送らんと都人士、老いも若きも、薪こる山人も、川に濯ぐ賤の女も、集い來て哀れを催し、袖を絞らぬものはなかつたのです。

執念深い道鏡、どうあつても卿を生かして置くことが出来ぬのです。送り出した輿を、

途中に襲はして、ズタ／＼に斬り殺して恨みをはらさうとしたのです。秋の野には尾花、野菊、さては女郎花、秋の深さを告げ、幽に聞ゆる虫の音も哀れを催してゐた。

道鏡にいひ含められたやつばら、和泉河内の境、生駒の山腹、晝も暗い茂みのうち、此處ぞと張り駕籠をおろさんとす。後から追つかけて來る道鏡が追手、今にも危害に及ばんとする。

時に一天俄にかき曇り、電光、雷鳴、やがて篠つく雨、曲者ども恐れをなし、手を下しかねてゐる。万雷なほも鳴りはためき、地軸も崩れんばかり、輿丁共おづ／＼震へてゐる。

此所に駆けつけたのは、かねて卿に同情をよせてゐた藤原豊永であつた。輿の中に眠りこけてゐた清麿卿を揺り起し、虎口の難を免れたことを祝し、前途を慰め、名残りを惜しみ西と東に相別れた。

感傷の秋も最中、吹く風寒く身にしみ梢を離れて散る落葉、落葉、峰吹く風に誘はれて、末は清瀧川の錦となる、知るものは神か。

浪華の港から纜を解く、急がぬ旅路、風のまにまに船を遣る。頃しも九月の末つかた。闇きは常の空であるが、曇なき身、心はつねに明石浦、いつしか過ぎて播磨湯、空飛ぶ雁の音信を、船路の枕にきけば、都にゆくかとなつかしく、曉の千鳥が洲先にさわぐかと思けば、心を碎く種となる。遙に吉備の國、故郷の空を伏し拜み、島を廻り、灘を涉り、船の上に幾日かを明かし暮したのです。或る日船子共にいつた。

どうか此船を宇佐の濱に着けてくれ、今一度宇佐八幡宮に参り、御禮を申し上げたい。是非とも船を廻はしてくれ。

と繰り返へしたのです。情も知らぬ船子共、中々聞かなかつた。然しどうしたことか、船はズン／＼風に送られて、十月二日といふに、宇佐の濱、長洲の港といへる渚に着いたのです。吹くは神風、神に招かれる船は蘆原に繋がれた。

卿には、ながの船路のつかれ、ましてや足さえ立たねば、船の苦よりよろばい出で、汀の草むらに座を占めて、八幡様の宮居の空を拜んでみました。

時に大宮のあたりから、冷やかな風が颯つとよせて来ると、三百匹ばかりの野猪が、何處からともなく砂煙をたて、大變な勢で駆けて来た。其一匹が卿の膝もとまで、尾を揺かして進んで来て、四足を縮め、頭を垂れ、物言ひたげに親しく寄つて来た。人、獸、界は異なるが、心は通ふのです。卿には唯、足を引きずり、其一匹の野猪に乗つたのです。すると數百の猪が、卿を中に取圍み、前後を護り衛つて、宇佐八幡宮の廣前に着き、卿のおりるのを待ち、行儀よく神前に羅拜し、あたりに影もなく猪山をさして引揚げたのです。卒然として現はれ、又卒然として消えたのです。猪山八幡、猪山峠は、今も床しい史蹟となつて昔を語つてゐます。卿には、大神の廣前に選ばれてゐます。夢か夢、唯恍然としてひれ伏してゐます。すると一尺ばかりの白蛇が現はれ卿の足をなめると、卿の精神は頓に爽かになりましたので、益々無邊なる神徳に感じ、専心寶祚の無窮を祈念してゐます。時に神無月の三日、茂みのかなたには、淡く三ヶ月がかゝつてゐた。吹いて来る初冬の寒風は身にしみ渡つたのであります。暫くすると、いつかの巫女が、またしても飄然として現はれ、

御聲いと爽かに御神託を傳えました。

卿固より無辜の身、此禍に遭ふは可憐の至り。吾卿の爲、是より西、企救の山下に温泉を湧出させん。往いて之に浴せよ。足の痛みも癒るべし。且この神馬にて行け。身の護りに此寶劍を與へよう。身の賄には神庫の綿八万屯を與へよう。

と聞くと、祝ども手毎に綿を運んで来て、神前に山をなし、又一方からは、「イザこれにお召し遊ばせ」と、神馬を曳きたてゝ來ました。卿には、重ねくの神恩に感泣し、祝共にうつた。

「余一人神恩に浴するは餘りに忝けない。此戴いた綿をば神人達にも頒ちくれよ。」と、多くの人にも喜びを分ち、神馬に抱き乗せられ、馬上靜かに宇佐をたゝれた。遙かに社頭を振りかへり、眞白き石橋の霜を踏んでは、「見返へり坂」洲先の蘆に夜の雨の濺ぐを聞いては、「見返へり松」、いつしか規矩の縣は石川村に着いたのです。馬をとめた所を今も「着馬」と稱してゐます。すると里人あまた集ひ、柴を折つて座を設けてくれる。其

所を今も柴折山といつてゐます。卿には更に小川に沿ふて茂みをわけ上ると、一人の童子が魚を釣つてゐます。

「このあたり、温泉があるはず、御存じないか」  
ときゝますと、童子釣をやめ、

此處を少し上ると岐多山の麓にお尋ねのお湯があります。

といつて、童子が道案内してくれた。童子はいつか影を見せずなくなつたが、此川を今では神告川といつてゐます。

果せる哉崖下に温泉がコン／＼と湧いてゐる。此温泉に足をしたすと、まさしく足の痛みも癒り、やがて歩行も自由になつた。これも宇佐八幡の御靈驗と、ひたすら感泣してゐます。

今は石川村も湯川村と改まり、神告川にすむドンコといふ魚は皆片眼ださうです。卿が足の自由ならぬとき、湯壺におりようとして、其ドンコの片眼を踏み潰したのです。

卿の足にかゝつたことを光榮に思ひ、昭和の今日まで、片眼のドンコがドンコ仲間で大威張りださうです。

卿の足は立ちました。卿にはかの竹和山に登り、お八幡様にお禮を申し、遙に東天、皇居の方を伏し拜み、寶祚御安泰を祝してゐますと、卿が捧げてゐた白い御幣が、大空に巻き揚つたといつてゐます。今は竹和山も足立山と改まり、山上に卿の御霊と八幡大神とを併せ祀つてあります。

それから日數経て、大隅國桑原郡につき、高尾寺といふに淋しい庵を結び、里の父老稻積などの愛護に無事な日を送つてゐました。

配所の月を眺める、殆んど一年。然し卿には更に淋しくなかつた。やがて清明な時節が廻つて來た。翌寶龜元年八月、光仁天皇がお立ちになると、九月六日、卿も姉の廣虫も、それ／＼配所から徴し還へされ、本位本官に復し、翌二年九月には、播摩の國守から、豊前の國守となりまして、豊前に参りました。卿にとつては豊前は親しみのある國なのです。

然し宇佐の神人共の中には、屢々朝廷を僞はり、道鏡に心をよせたものもゐたらしいので大宰府から役人を差遣はし、龜卜を以て事を糺し、神人の陶汰を行ひ、惡弊を改めたと申します。

清けさは寄藻の川にかけうつす

月にたぐへし君が眞心 精一

天地のむたきはみなき神よさし

公の至誠に通ひけるかも 健一

~~~~~  
下宮上棟式ををろがみまつり

万歳棟木匠高く槌うてば諸聲にして網ひきまつる 吾一

三柱の神のみいづのいやちこに耀き渡る朱の玉垣 健一

宇佐 栞

◆境内―境内廣瀾、約四万五千坪、寄瀨川の水涼々として西北を流れ。御食川の水また東南を巡り、塵寰を限り、一淨域をなしてゐる。春は陽光遅々として上宮の朱檻に輝き、鎮西の日光の名に背かず。神苑の櫻花は青松をつづり雲と匂ひ、白砂に映じて霞とたなびく。初夏の新緑又薫り深く、三千年の茂みの中を行く、三伏の盛夏も汗の事を忘る。秋の月は大尾山の紅葉に映じ、冬の時雨は老松の梢に音なひ、四季移りぬく景觀は、常に賽人を送迎し、無償の土産を呈してゐます。

◆境内十勝の歌

- 上宮春朝 小倉山あけゆく春の霞にも神代へだてぬ光見えつゝ 烏丸大納言光胤卿
- 馬城峯雪 白木綿を木々にもかけて馬城の山雪にはへあるあけの玉垣 同
- 大尾山月 神垣の月ぞさやけき雲霧のおほふの山の名にもたかひて 同
- 下井納涼 祝子がくむ手や涼し神の垣下の井の清水影も濁らず 同
- 千歳松雨 色かへぬ千歳の松のいくかへり時雨でもなほとことのはの影 烏丸大納言光胤卿

- 菱形池藤 枝おほふ岸根の藤の影ひたす花も世も似ぬ菱形の池 同
  - 下宮冷水 御食炊く水清くして世々する宮居とうときうさの山影 同
  - 頓宮新秋 御幸せし夏はきのふの淺瀬川秋たつ浪の夕涼しも 日野大納言資枝卿
  - 月瀬川螢 岩かねに影ちる波の月の瀬をとめて螢も夜の川風 同
  - 馬場櫻花 櫻咲く木影幾度ゆき歸へり駒も心や花にひくらん 同
- 
- 上宮春朝 忌垣内の花より白む朝ほらけ片そきの空うち霞みつゝ 糸永茂昌
  - 馬城峯雪 たからかに雪は積るか馬城の峯に神の御威稜と仰き見よとて 同
  - 大尾山月 大尾山に上る月かな眞さやけく松をはなれて紅葉匂はせ 同
  - 下井納涼 参入れば夏なほ涼し水冷へて下井が谷はまだき秋めき 同
  - 千歳松雨 冬されば時雨降るなり千歳松にうつたかければ松のかゝりて 同
  - 菱形池藤 池の面にうつりあひけり藤の花紫匂ひ菱の緑に 同
  - 下宮冷水 神の御食洗へば冷へぬ夏すらも下つ宮居は清水わきつゝ 同
  - 頓宮新秋 涼しくも秋は來にけり頓宮に夕を時と夏をはらへば 同

月瀬川螢 夏虫は浮び渡れり月の瀬をうつれる影と光きそひて

同

馬場櫻花 賑はしく乱れ散りけり馬場の花、駒とふたひに鞭にふれつゝ

同

◆小椋山（小倉山ともかき、龜山、菱形山の名もある。大尾山、西山と共に奈良の三山にふぞらへるともいつてゐる。）

◆本宮（小椋山の頂上に南面して御三殿鎮まります。向つて左より一、二、三の御殿と申す。現今の社殿は安政元年に起工し、九年を費し文久三年に竣工したもので、所謂八幡造りて、明治四十年特別保護建造物に編入されたものです。）

◆勅使門（廻廊の中央にある樓門で兩樓門ともいふ。勅使並に奉幣使參向の時に限り開くのです。）

◆申殿（これより祝詞を奏し献饌をなす。）

◆西中門（神輿の出入する門。不開の門ともいふ。）

◆勅使松（勅使參向の度、京の松を持ち來りて植ゑる。今あるのは文化元治の兩度のものであります。）

◆西大門（黒田長政が豊前を領するやうになり、文祿の初め改造されたもので、其構造全く桃山式である。）

◆宇佐祖神社（祭神は宇佐津彦です。往古より神明木におわしてゐたが明治九年こゝにうつし申したの

です。

◆龜山神社（祭神は大山積命で、小椋山守護の神です。）

◆若宮神社（應神天皇の皇子大鸕鷀尊、軍總別皇子、大葉枝皇子、小葉枝皇子、雌鳥皇女を祭る。昔朝廷が宇佐宮の神勅により、大事を決するには、先づ此社頭にて龜卜を修めるを例としてゐた。それで拜殿は今尚ほ土間のまゝである。）

◆朱鳥居（一名一の鳥居。慶長十五年細川忠興、本宮以下五十餘宇の造營をされた時、妹、婚日出城主、木下延俊をして、此鳥居を作らしたが、其後享保中、木下俊長修理を加へて今日となつてゐる。八幡式鳥居の標本です。）

◆春宮神社（應神天皇の皇子菟道稚郎子命を祭る。社前の砲は陸軍省奉納の日露戦争戦利品である。）

◆神馬舎（神馬を飼蓄する所、昔から白毛で眼臉の紅い一種變つた馬です。）

◆高倉（神寶祭器を藏す。）

◆御輿掛（幣便及宮司の輿を倚する所。）

◆下宮（上宮に對する名で、祭神は固より上宮と同じ。神饌の用意をする所なので御炊殿ともいふ。昭和八年改築されたが保護建造物として宮内省よりの工匠が來て嚴かに上棟の式など行はれた。）



- ◆サマシ竹——昔對馬國のト部が、若宮の拜殿で龜を焼き吉凶を占ふとき、其龜とサマス料の竹を取つた所だといふ。
- ◆寶物館——本宮に貴重な寶物數百点が陳列してある。神寶使の納めた御宸筆御裝束、御太刀等他で見ることの出来ぬものが多い。少し念を入れて見て貰いたい。
- ◆能樂堂——高倉天皇安元年の創立、元和中細川忠興侯の再建
- ◆彌勒寺礎石——彌勒寺は聖武天皇勅願寺で、神宮寺と號してゐた。光仁天皇の御宇和氣清麿公再興。嵯峨天皇の朝傳教太師四十七歳の時、當寺で修業したといふ。嘉永二年八月七日暴風のため倒壊したまゝ。今は礎石のみ存してゐる。八坂神社は當年の守護神であつた。あたりに古瓦の散在するがある。經堂、金堂、講堂及東大門の礎石の古を語るものがある。
- ◆八坂神社——素盞鳴男命を祭る。幣越の神事と稱する鎮疫祭が行はれる。古は正月十三日に心經を讀んだと見へ、心經會と今もいつてゐる。
- ◆西樓門——仁王門ともいひます。彌勒寺の五大門の一つで、細川忠興侯の修理を加へたもので、彌勒寺の遺物としては此樓門だけである。仁王様も上乘の作である。
- ◆吳橋——「親が大工なら子までも大工。宇佐の吳橋は子がかけた。」

といふ民謡があります。元和元年細川忠興の子忠利が家臣菅村和泉守を奉行として、架設したものだから、此俗謡があるのでせう。後伏見天皇正安三年に、勅使にたつた和氣篤成卿の歌に、

影見れば月も南に寄深川くるゝに橋を渡る宮人

- ◆騰の隈——吳橋の東南高き所。宇佐津彦が神武天皇を迎へて、一柱騰宮を建てたといふ古蹟です。
- ◆百體殿——市街の西端にある。八幡大神日向隼人を征したまひ、其隼人の靈を祭る。かたへの梟首場は、隼人の首級百を埋めし所といふ。其社殿がやがて保護建築物に指定されるさうです。
- 宇佐に參るなら百體さまに、親のかけたる願もあるといふ。俗謡がありますが、流行病などの時、參る人が多い。
- ◆極楽寺——康和三年大宰大貳大江匡房卿が建立したといふ。大貳堂に安置してあつた、阿彌陀如來が本尊ですが、別堂には聖武天皇の勅願彌勒大佛が安置してある。靈元天皇の延寶中に空念法師が八万四千人の頭髮を集めて刺繡した曼陀羅といふ寶物もある。
- ◆南尚翁の銅像——南一郎米尙氏は廣瀬井堰成功者である。其恩恵に浴するものが建立して、年々新川祭とて祭典を行ふてゐる。
- ◆初澤池跡——其昔奈良朝女禰宜杜女の身を投じた池として、日本三澤池の名がある。京都の廣澤の池、

奈良の猿澤の池と併稱されてゐる。

◆放生池——信者の生魚を放つ池

◆護王神社——和氣公を祀る

◆大貳堂——康和三年太宰大貳大江匡房の建てたので其名があるが、明治元年今日の繪馬堂と建ち代つた菱形池——中に六つの小島がある。そして石橋が九つ架け渡してある。其れが皆奇体である。

豊國の菱の池なる菱の根を、とるとや妹が袖ぬらすらん。

紀貫之

◆賜饌場——あたりは返田かへしたといひますが、大神比叢が大神發現の時土偶をつくり、殘餘の土を返したからの名といふ。大正九年の大演習に際し、御饌を賜はつた所です。暫く競馬場となり、此頃は専ら運動場となつてゐる。

◆大尾山——稱徳天皇神護景雲三年七月十一日和氣清曆公の神勅を承けた所、山上に和氣公碑があります、晩秋の紅葉は一つの眺めです。

◆鋒立神社——大尾山の西麓、忠魂碑の側、欽明天皇の三十二年二月十日、大神御發現のをり大神比叢鋒をたてゝ齋ままつた所

◆御靈水——小原山の北溪、八幡大神、鍛冶の翁と現はれた所で御鍛冶場ともいふ。靈水滾々として湧き

出て、下井の靈水の名がある。

◆大鳥居——昔は赤色に塗つてあつたといふ。今のは明治の初年、御許山の杉で建てたので、高さ二十八尺、桁が二十五尺とある。

◆頓宮とんみや——淺瀬川の頓宮と呼ぶ。毎年夏の御神幸の時、三基の神輿此所に逗留し、大祓の神事が行はれるのです。

◆大樂寺——後醍醐天皇の勅願で、宇佐公連といふが、奈良西大寺の道密といふを招いて開基した寺です、今は眞言宗です。行基の作と稱せられる丈六の彌勒菩薩は國寶となつてゐます。

◆圓通寺——後嵯峨天皇寛永中、榮尊師(神子禪師ともいふ)の開基で、宇佐神宮とも關係深き古刹である。

◆宇佐津彦碑——中學校の下、神明木といふ所にある。

◆松田三右工門墓——中學校門前、糸永茂昌翁の壽碑の東の丘にある。神領の民の爲め江戸に直訴して民苦を濟ふた人といつてゐる。

◆麻生島圭本尼墓——鐵道踏切の所にある。寛文中尼の身で堰を架し水路を開いた恩人といつてゐます。

◆神境擴張——もう時間の問題です。今の境内四万坪は八万坪になり、吳橋を這入つての神明町の人家をば固より撤して神苑に復舊し、大尾山の方面にも擴張をなす、其計畫はやがて實現するらしい。期して

待つべきです。

昔の社家四百、神領九州に亘るといつた時代に返へすことは不可能かも知れぬが、思想受難の今日、神社を中心に復古気分も進展しつゝありますし、やがて遺跡も一々保存され、色々と文化的施設も行はれ、参拜者に満足を與へるやうになる、ことと思ひます。本年下宮の造營が行はれましたが、これから六年計畫で、政府の力で、造營物は固より、神域の擴張修治をなすことになつてゐますし、一方には宇佐神宮復興奉賛會も既に設けられ、着々進行されてゐますから、遠からず面目を一新し、神徳が八方に光被することと思ひます。

宇佐 (終)

昭和九年一月三日印刷  
昭和九年一月八日發行

定價 五拾錢

著者兼發行者 大分縣宇佐郡八幡村  
龍膽 小野 精 一

印刷者 大分縣宇佐郡長洲町  
阪本 棗 次 郎

長洲活版所印刷製本

發行所

大分縣宇佐郡八幡村  
宇佐郡史談會  
振替福岡一七五七〇番

終

